

高野。 いや、物惜みするばかりではあるまい。御不審のかゝつてゐる我々に助力して、なにかの御咎めなどあらうも知れぬといふ懸念から、わざと情なく致したものと推量らるゝ。されば當方でも諄うは頼まず、そのまゝにして立歸つた。

政宗。 おゝ、それがよい。この上は誰にも頼むな。一粒の米たりとも他人の恵みを求むるな。奥州から大名の乞食が上つたなどと噂されては、末代までの恥辱であらうぞ。

高野。 さりとて空しく手を束ねて居りましたは、これだけの人間が生きてはるゝられませぬ。湯本の宿まで下りますれば、あの通りに諸商人が店をならべて居れど、謹慎中の我々が妄りに下山も相成らぬので、ほとく當惑いたしました。

玉川。 (高野に。) この上に頼むは浅野どの……。彼の御仁は武勇一遍に見えながらも、武士の情も辨へられて、初めから我々を勸つて下されましたれば……。

高野。 さうぢや。われらも左様に存じてをる。彼の御仁ならば我々にも涙をかけられて、何とか見繼いでくるゝであらうとは存するが、生憎に路が遠い。浅野

殿の陣所はこゝから二里ばかりも距れてゐる。それに困つた。

玉川。 そこまでうかくとは出られませんまいか。

政宗。 出られぬものを出るには及ばぬ。無理に出て行つて頼んだとて、その浅野も背いてくるゝやら何うやら判らぬ。政宗は奥州の邊土に生れたれば、寄手三十萬人の中に一人の親戚も知己もない。右を見ても左を見ても皆他人ぢや。まして今は謹慎の身の上、誰が快く見繼いでくれうぞ。いたづらに諸人の物笑ひにならうよりも、そこらにあるほどの木の根を掘り、草の葉を咬んでなりとも、落着

のひまで生き存ふる工夫をせよ。たとひ飢ゑて死ぬればとて、かさねて他人に無心合力を頼むまいぞ。

二人。 はあ。

(薄く雷の音きこゆ。)

政宗。 おゝ、雷が鳴る。こゝへ来てから初めてぢや。

高野。 (空を仰ぐ。) 何さまあちらの峰から眞黒な夕立雲が湧き出してまゐりまし

た。

玉川。このやうな山の中ぢや。雷はすさまじいかも知れませぬ。

白石。天地も崩るゝやうな大がみなりが鳴りはためいて、弱蟲どもの眼を醒ますも好うござらう。

(空の色だんくんに暗くなりて雷鳴近づく。)

高野。いよゝ空は暗くなりました。どうでも夕立でござりませう。殿には内へお這入りなされませ。

政宗。むゝ。(空を仰ぐ。)やがて一雨まるるであらう。寢てゐる者どもを起してやれ。

(電光ひらめく。政宗はその光を仰ぎながら小屋の中に入る。高野もついでに入り、玉川も手傳ひて入口にまきあけたる荒蕪をおろす。電光しきりに閃く。白石は無言にて下の方へ行きかゝる。)

玉川。(うしろを見かへりながら。)駿河さの。

白石。なんぢや。

玉川。(小聲で。)關白からは今に何の沙汰もなく、かうしていつまでも捨置かるゝやうでは、殿の御運はどうでござりませう。

白石。もう大抵は判つてゐる。いや、奥州を出る時から判つてゐたのぢや。我があれほご御意見申したに、殿が日頃の強情、その傍には智慧自慢の小十郎めが附いてゐるので、無理に出て來た果がこれぢや。おそらく殿は切腹、われゝは打首にでもなるのであらうよ。

玉川。就ては如何でござりませう。寧ろ殿のお供をして窃かにこゝをぬけ出しては……。夜にまぎれて山越いたしたら、無事に落ち逃びらるゝであらうと存じまするが……。

白石。(考へて。)なるほど、それも思案ぢや。若い者どもは殿のお供して行け。あとは壹岐と我等が引受くる。して、それはお身の一存か、但しは一同の思ひ立か。

玉川。(寝てゐる四人を指さす。)これにゐる者共もみな同意でござりまする。たゞ懸念なは小十郎の……あの人も同意してくれませうか。

白石。(頭を掉る。)いや、小十郎は不得心にきまつてゐる。さりて出しぬいても行かれまい。

玉川。(二人は顔を見あはせる。)(決心して。)殿には換へられませぬな。

白石。さうぢや。(小聲で。)斬れ。

玉川。はあ。

白石。(二人は再び顔を見合せる。雷鳴はけしく、電光閃めく。)(二人は再び顔を見合せる。雷鳴はけしく、電光閃めく。)

白石。おゝ、いよく降つて来るぞ。一先づ奥の小屋へ行かうか。
(白石は下の方の奥に入る。玉川も百合を入れたる鉢をかゝへて同じく下の方に入る。雨の音俄に烈しくなる。今まで寝てゐたる若侍四人はこれにおごろきて飛び起き、自分達の敷きたる荒藁などをかぶりて、うろたへ騒いで下の方の奥へ逃げ込む。)

片倉。殿。おはすか。小十郎戻りました。
政宗。(内にて。)小十郎。戻つたか。早う這入れ。
片倉。はあ。(藁をかゝけて内に入る。)

(松山甚三郎は跣足にて山の芋をかゝへ、同じく濡れながら崖路を轉けるやうに降り来り、小屋の前にて聲をかける。)

松山。おゝ、降る、降る。甚三郎戻りました。
政宗。(内にて。)甚三郎、大儀ぢや。強い雨ぢやな。
高野。(藁の間より顔を出す。)何ぞ見付けて来たか。
松山。山の芋を揃つてまゐりました。(見せる。)

高野。 よい、よい。雨が歇んでから洗うてくれ。

松山。 はあ。

(松山は下の方の奥に入る。高野も内に入る。雷雨の聲少しく薄れて、電光しきりに閃めく。小屋の内にて主従の語る聲きこゆ。)

政宗。 小十郎。その姿して誰にも覺られなんだか。

片倉。 大軍の屯してゐる所でござる。見馴れぬ雑兵が一人や二人走り廻つて居つたとて、誰も怪むこゝではござらぬ。

高野。 その袖印は誰の陣ぢやな。

片倉。 誰の陣か存ぜぬ。路に落ちてゐたのを拾うたのでござらぬ。

政宗。 して、なんぞ聞き出したこともあるか。

片倉。 斯様な姿に扮装つて、陣屋陣屋を立廻り、それとなく聞き合せましたれど、どうも取留めたことは判りませぬ。

政宗。 政宗の身の上、どう落着するか判らぬか。

片倉。 その落着が善しとも云ひ、悪しとも云ひ、思ひくの噂ばかりで、たしかに斯うとは突き止められませぬ。

政宗。 所詮は關白の胸一つで、これだけの人間の運命が決るのであらう。

高野。 さうかも知れませぬな。

(内の話聲しばらく止む。下の方より鹽澤五兵衛は片手に釣竿を持ち、片手に大いなる山女一匹をつかんで出づ。)

鹽澤。 (外にて大きく呼ぶ。)殿、釣れましたぞ。釣れましたぞ。

片倉。 え、大きな聲をする奴ぢや。五兵衛か。何を釣つた。

鹽澤。 (得意らしく。)山女の大きいのを釣りました。先づ御覽くださいませ。

(片倉は藪をかゝけて外に出づ。)

片倉。 おゝ、なるほど見事なものぢや。こんな魚がこの川にも棲んで居ると見ゆる。

(下の方の奥より松山甚三郎出づ。)

……小 田 原 陣……

松山。 さうぐいしい。何を釣つたのぢや。おゝ、山女ぢやな。

鹽澤。 早速に料理して殿に差上げるのぢや。

政宗。 (内にて。)五兵衛。何を釣つた。われらにも見せてくれ。

片倉。 (空を見る。)おゝ、雨も一としきりで、小降りになつたやうぢや。爵陶しいから蕙をあけい。

松山。 はあ。

(松山は入口の蕙をあける。高野も手つだひて蕙をまく。政宗は切株に腰をかけてゐる。)

政宗。 五兵衛、手柄ぢやな。(笑ふ。)

高野。 まつたく大手柄ぢや。これで殿に生魚を差上げらるゝわ。併し焼くにしてからが鹽がないな。

片倉。 いや、何かの役にも立たうかと思つて、まごやらの陣屋で少しばかり貰つて来た。

松山。 おゝ、鹽がござるか。
(片倉は腰に着けたる麻袋より紙につゝみたる鹽を出す。)

片倉。 雨に濡れてしまつたが、それでも無いよりは優ぢや。魚にまぶし付けて焼くがよからう。

鹽澤。 よろしうござる。(喜んで鹽を受取る。)

政宗。 今の身になつても政宗は口果報がある。今夜はえらい馳走になるな。

鹽澤。 はあ。
(人々は顔を見あはせて、少しく暗い心持になる。空の色薄明るくなりて、雷の音次第に遠くなる。)

政宗。 おゝ、だんぐに明るくなつて来た。氣色ほごには降らぬ雨であつたな。

(松山は内に入りて政宗の腰掛を持ち來り、つゞいて片倉の腰掛も持ち來る。)

高野。われらの腰掛はいらぬぞ。久五郎は百合をさうしたかな。

松山。茹でゝゐるでござりませう。

高野。久五郎は百合を茹でる。お身は山の芋を掘つて来る。五兵衛は魚を釣つて来る。これで殿は勿論、われ々までも今夜の食物に事缺くまい。先づは安心ぢや。しかし久五郎は、何をしてゐるか判らぬ。これ、見まはつて来ようか。

(高野は政宗に一禮して下の方の奥に去る。松山と壩澤も一禮してあこより續いて立去る。)

政宗。今の雨で涼しうなつたな。

片倉。雷はおそろしいが、扱そのあとは爽かなものでござる。

政宗。無事に通り過ぎたら爽かぢやが、その雷が落ちたら何うなるかな。

片倉。雷が落ちたら五體も微塵に撃たるゝまでぢや。その覺悟で奥州から上つて来たのではござりませぬか。いかなる大がみなりが鳴りはためかうとも、今更おどろくことではござるまい。

政宗。われらは勿論その覺悟ぢやが、國許を出た頃とは違つて、この頃では家來もが餘り不憫になつて来た。

片倉。(笑ふ。)殿も涙脆くおなりなされたな。

政宗。いや、笑ふな。政宗は出羽奥州で百二十萬石の大名、その家來の中でも一二を争ふ家柄の片倉小十郎、高野壹岐、白石駿河、その他の者共も年こそ若けれ、槍を把つては一廉の侍ぢや。その者共も此頃のありさまは……。その日の日の飢に迫つて、ある者は泥まぶれになつて木の根や草の根を掘りあるく。ある者は乞食のやうに腰をかゞめて糧米の無心合力を頼みまはる。百姓の眞似、乞食の眞似、それが伊達の家來のすることか。思へば無念の涙がこぼるゝ。小十郎、その方とても其通りぢや。前立うつたる兜を着て、馬上で千騎二千騎を指揮すべき天晴れ一方の大將分が、袖さへも付けぬ番具を着て、誰が眼にも雑兵足輕ぢや。その淺ましい姿をして陣屋陣屋を忍びあるき、よそながら主人の噂を探り聞かうとする。いかに家來とは云ひながら、あまりに苦勞をかけ過ぎて、氣の毒と

いふよりも不憫でならぬ。

片倉。不憫のお詞は萬々忝けなうござるが、今この場合に臨んでは、主も家來も一生懸命で、根かぎりに働くより外はござりますまい。くごくも申す通り、これは相手と我々との根くらべぢや。こゝへ追ひ込まれてからも半月にも相成れば、善いにせよ、悪いにせよ、やがて關白の御陣から何かの御沙汰があるに相違ござらぬ。誰も彼も今しばらくの辛抱でござりまするぞ。

政宗。(舌打する。)その辛抱が並大抵のことか。殺すとも付かず、生かすとも付かず、生殺しの蛇のやうにして捨置かるゝは、あまりに人を苛むこいふものぢや。政宗が憎いと思ふなら、なぜ眼の前に呼び出して立派に腹を切らせてはくれぬ。どうでも我々を飢殺しにして、餓鬼道へ墮す氣か。さりとは前代未聞の仕置ぢや。

片倉。左様におむづかりなさるな。關白が果して殿をほろほす心あらば、すぐにも呼び出して切腹さす。それを今まで斯うして捨置くからは、十に九つの望みはござる。

政宗。十に九つ……。(考へる。)さうであらうか。

片倉。萬一その占ひが外れたとしても、いざといふ間際までは、然う思うて落付いてゐるが優でござる。左なきだに苦しい中で、毎日苛々してゐて何となりませうぞ。壽命の毒ぢや。お止めなされ。

政宗。その壽命もいつまで續くやら判らぬぞ。

片倉。(又笑ふ。)相變らずお氣が短いなう。

片倉。(二人は暫時の沈黙。河鹿の聲きこゆ。)(二人は暫時の沈黙。河鹿の聲きこゆ。)(二人は暫時の沈黙。河鹿の聲きこゆ。)

政宗。むゝ。(これも耳を傾ける。)(こゝらの河鹿も好う鳴くな。)(政宗は起つ。片倉も起ちながら、河鹿を聴く心にて二人はしづかに河邊を徘徊す。)

片倉。會津の東山でもたびく、河鹿の聲を聴きましたな。

政宗。東山の川には好い河鹿が澤山棲んでゐる。温泉もある。こゝと同じやう

な所ぢやな。

片倉。殿。故郷の會津が戀しうなりましたか。

政宗。故郷はやはり懐しいな。

片倉。その會津を手放すやうなことが出来たら何うなさる。

政宗。會津を手放す……。(屹と片倉の顔を見る。)それは政宗の首を取らるゝも

同じことぢやわ。

片倉。(冷笑ふやうに。)殿の首はそれほど安いか。

政宗。何……。

片倉。殿はなんと思召すか知らぬが今度のことは所詮無事では済みませぬぞ。

首尾よう納まつてからが、おそらく會津は召上げらるゝでござらう。首を取らるゝ

ゝか、會津を取らるゝか、二つに一つぢや。今の中に御思案なされ。

政宗。首尾よう相濟んでからが、會津の領地は召上げらるゝ。(興奮して。)それが

が何で首尾好うぢや。政宗が命賭けて切取つた會津一圓を唯おめくゝと召上げら

るゝほごならば、一思ひにこの腹を見事搔つさばいた方が遙かに優ぢやわ。

片倉。さりとて今となつては是非がござらぬ。そこが御思案と申すのぢや。一

旦召上げられた領地は再び取戻す時節もある。小十郎はこの年まで、斬られた首

のつながつたを見たここはござりませぬ。

政宗。かうと知つたら小田原三界までわざ／＼出て来るではなかつたものを……

……。首尾が悪ければ切腹、首尾が好うて會津の領地を召上げらるゝ。それで政宗

の立つ瀬があるか。命を的に、降参同様の恥を忍んで、秀吉の膝の前にひざまづ

くも、所詮は伊達の家や領地を全うしたいと思へばこそぢや。それがならぬ程な

らば、初めから國許に楯籠つて、秀吉を相手に最後まで花々しく戦うたが優であ

つたに……。 (歎息する。)それも今は叶はぬか。

片倉。會津一圓を召上げられても、御領地の六つ一分は残ります。關白を敵

にして最後まで戦うたら、お家は丸潰れ、この小田原の北條さのが好い手本でござ

りませうぞ。

政宗。むむ。(考へる。)切腹させらるゝも残念ぢやが、會津を取らるゝも無念ぢやなう。

片倉。(しづかに。)殿の胸にはまだ先刻の夕立雲が錢つてゐる。あれ、御覽なされ、空はすつかり晴れましたぞ。

政宗。(空を見る。)むむ、空は晴れた。

片倉。この大空のやうに心を廣くお持ちなされ。今夜は二十日で宵闇ぢやが、まだ暮れ切らぬ夕空は水のやうに澄んで居ります。

(政宗は無言にて空をながめてゐる。小屋のうしろより高野堂岐出づ。)

高野。涼しい夕暮に相成りましたな。

片倉。今の一雨で凌ぎようになりました。

(政宗は矢はり眉を皺めて空を仰いでゐる。高野はその氣色を見て片倉の草摺をひき、さうかしたのかと眼でたづねる。片倉は頭を掉る。政宗はやがて無言にて引返し、小屋の前の腰掛にかゝる。)

片倉。(笑ひながら。)殿。小十郎の笛をお聴かせ申さうか。

政宗。(初めて見返る。)なに、笛を吹く。其方が自慢の笛も久しう聞かぬな。

高野。いや、自慢ばかりではござらぬ。小十郎はまったく笛の上手で、陣中にも

も笛を離さぬといふ風流人ぢや。われらも久振りで聴きたい。お吹きなされ。

片倉。(又笑ふ。)小十郎ほどの名人の吹く笛を聴いてゐれば、おのづと胸も開け

まする。なあ、殿。さうではござるまいか。

政宗。(微笑む。)いつもの自慢は扱措いて、まあ兎もかくも吹け。

片倉。吹きまする。

(片倉は小倉の内に入りて笛を持ち來る。)

高野。その笛はお身が秘藏のもの、何とか云ふたな。

片倉。これは潮風と云うて、おそらく日本に二つとない……。

政宗。また自慢か。うるさいな。なんでも可いから早う吹け。

片倉。はあ。

(片倉は歌口を濕して笛を吹く。政宗も高野も黙して聴く。下の方の崖路を傳ひて、松の丸は侍女二人を連れて出で、川のあなたにたゞすみて、笛の音を聴いてゐる。やがて松の丸は侍女にさゝやけば、侍女は心得て、川向ふより聲をかける。)

侍女一。失禮ながらおたづね申します。

(これにて片倉は笛をやめる。高野は河端に出で答へる。)

高野。何事でござるな。

侍女二。そなた衆はどなたでござりまする。

高野。われは奥州の者でござる。

松の丸。奥州の者……(考へる)では、伊達の衆ではおはさぬか。

高野。左様でござる。

松の丸。笛のしらべの面白さに、思はずこれまで引かれてまゐりました。

(片倉も笛を持ちて進み出づ。)

片倉。拙き調べを御賞美下されたお前様は……。

松の丸。さあ。(躊躇する。)上方の者でござりまする。このあたりの風呂へまゐりますると、生憎の雨にふり籠められ、暮れかゝつてやうく歸る途中、こゝらにはめづらしい笛の音に、ついうかくと引かれて來ました。承はれば伊達の衆とやら、この間からこゝに御逗留でござりまするか。

(片倉は心にうなづきて、俄に形をあらためて土にひざまづく。)

片倉。仰せの通り、われは伊達の家來、當月五日より半月ほどもこゝに謹んずして居りまする。

松の丸。(考へる。)もう半月になりませるか。

片倉。小田原陣着到がくれしとて、關白殿下の御不審かゝり、この底倉の谷間に謹慎仰せ付けられました、主従十餘人は住むところもなく、食ふものも無く、野伏り非人も同様の淺ましき境界に身を落して、生甲斐もなき口を送つて居ります。主人政宗が上様に對して、毛頭も不忠を存せぬことは弓矢八幡、わけては

當所の箱根權現も見そなはず筈。着到延引の仔細も當方に萬々申開きの筋あれど、おん目通りを許されねば致方もなく、今日はお呼び出しがあるか、明日は御使者がまるるか、唯そのみを待ち暮してをる次第。お察しくださりませ。

松の丸。それはお氣の毒に存じます。伊達の衆がまるられたことは、上様にも勿論御存じでもござりませうが、毎日の軍評定、なにや彼やの御用が忙しいので、自然御對面も御延引になつてゐるかと存じられます。

片倉。大方左様であらうかと、我々も今までは辛抱して居りましたが、誰からも見繼ぎのない身の上では、所詮長うは繋がれませぬ。木の根や草の葉を咬んでをりましては、われくの命も既う幾日……。やがてはこゝに枕をならべて飢死するでござりませう。

松の丸。おゝ。

片倉。さうでも上様の御不審晴れず、われくどもの罪科定まつて、武士らしい切腹仰せ付けらるゝならば格別、このまゝ飢死いたしまするは近頃残念でござ

ります。毎日の軍評定、お忙しいとは申しながら、陣中にて茶の湯の御催しあるひは歌舞妓踊、あるひは能狂言、さまざまのお慰みもあるやうに承はります。その一時半時の暇を割いて、政宗に御對面は許されませぬか。いや、斯う申すは我々の愚痴、決して上様をお怨み申すではござりませぬ。なにとぞお聞き流しを願ひまする。

松の丸。(思案して。)なにぶんにも水の音が高いので、そちらで云ふことの半分も聞えませぬ。

片倉。え。

松の丸。聞えてからがわたくし共には判らぬこと、何とも此上に申上げやうもござりませぬが、唯おまへ様方の御難澁は幾重にもお氣の毒に存じます。(侍女に) さあ暗うならぬ中に戻りませう。(片倉に。)これでお別れ申しまする。

片倉。失禮御めん下さりませ。(松の丸は侍女に扶けられて崖路を登りゆく。)

片倉。南無、八幡。(手をあはせて空を拜む)殿。時節がや、参りました。

政宗。時節が来た……。今の女子は自體何者ぢや。

片倉。あれは關白の思ひもの松の丸といふ女性でござる。こゝらの風呂へ湯あみに来る姿を窃かに見受けたことがござれば、測らすこゝへまゐられたを幸ひに、よそながら訴訟申した。

高野。なるほご唯ならぬ粧ひと見たが、あれが名に聞く松の丸か。

政宗。しかし關白が彼の取次を背くであらうか。

片倉。女子は涙脆いもの。われくが此の體たらくを見たからは、おそらく哀れを催して、關白に然るべく取次いでくるゝでござらう。

政宗。取次いで呉るゝ……。屹と取次いでくるゝかなう。よいにせよ、悪いにせよ。關白と顔を見あはせぬ中は、政宗の運は定まらぬ。もし松の丸が取次いでくれたら、その呼出しはいつ頃であらうな。

片倉。案外に早いかも知れませぬ。

政宗。おゝ、一日も早いがい。かう焦らされてゐては逆も堪らぬ。

片倉。かさねて申すまでもござらぬが、いよく關白の御前へ召されましたら彼の會津の一條……。

政宗。むゝ。(顔をしかめる。)

片倉。今が大事の場合でござりまするぞ。

(政宗は苦り切つて答へず。下の方より白石駿河は先に立ち、玉川久五郎は茹でたる百合を持ち、松山甚三郎は山の芋を持ち、鹽澤五兵衛は焼きたる山女を持ちて運び出づ。これらの食物はすべて折敷に草の葉を敷きて盛りたり。)

玉川。殿。夕飯のお仕度が出来ました。

政宗。おゝ、山のもの、川のもの、馳走は数々ぢや。政宗が一生に一度の大事もやがて近いたやうに思はるゝ。膽を太らす爲に飽までも喫はうぞ。

高野。今夜のお相伴は我等であつたな。

……小田原陣……

(政宗は先に立ち、高野もつゞいて小屋の内にいる。玉川、松山、鹽澤の三人も入りて、入口の蕨を下す。)

片倉。もう薄暗うなつて来た。(下の方にむかひて。)誰か来て篝火を焚け。

白石。いや、その前に些と相談がある。(片倉の手を取りて下の方へゆきて囁く。)

片倉。(笑ひながら頭を掉る。)とても、とても、そのやうなことが……。

白石。ならぬか。

片倉。なるものでない。よう考へてお見やれ。

(玉川久五郎は小屋の蕨をかゝけて窺ふ。下の方より若侍四人も忍び出で、窺ひるる。)

白石。お身はどうでも不得心か。

片倉。こゝにおとなしくしてゐたら、領分を削らるゝくらゐで大方は無事に済む。こゝを逃げ出したらお家は屹とほろぶる。

白石。こゝにゐても亡ほされたら何うするか。

片倉。逃けても亡ほさるゝ。こゝにゐても亡ほさるゝ。どちらにしても同じことなら、じたばたするだけ未練でござらう。

白石。むゝ。

(白石は見かへりて玉川と顔を見あはせる。玉川は思ひ切つて小屋より出ようとする時、政宗は内にて聲をかける。)

政宗。久五郎、どこへゆく。

玉川。はあ。(餘儀なく内に入る。)

政宗。駿河はそこにあるか。

白石。はあ。

(若侍四人は合圖を待つて小十郎に切りかゝらんとすれど、白石はその合圖に少しく躊躇してゐる。小十郎は唯ならぬ形勢を覺りて警戒する。蕨をかゝけて政宗、高野出づ。あとより玉川、松山、鹽澤も出づ。)

……小田原陣……

片倉。お食事はもう相済みましたか。

政宗。臆を太らすために飽までも喫はうと思つたが、表が騒がしいので何うも落付いて箸が把られぬ。

(白石は思はず顔を背ける。)

政宗。(下の方を見かへる。)日が暮るゝところらへは色々の悪い蟲が來てならぬ。早う篝火を焚け。

四人。はあ。

(若侍等は餘儀なく引返して去る。政宗はしづかに空を見る。うすく水の音きこゆ。幕。)

第三幕

(一)

石垣山の秀吉陣所。陣所とは云へど、最初より持久戰の覺悟にて、數寄を凝らして作らせたる、新座敷なれば、襖、簾、もろくの調度のたぐひ、眼も醒むるばかりに鮮かなり。されど、流石に庭先とおほしき所には、桐の紋打つたる緋の陣幕を張りまはし、庭の上の方には金の瓢の馬標を立てさせ、小具足の武者十餘人居流れたり。うしろには杉の立木生ひ茂れり。

(座敷にては今や酒宴の體にて、豊臣秀吉は褥に坐して脇息に倚り、そのそばには刀掛あり。うしろには堀三十郎と小姓二人、左右には松の丸と侍女十餘人、猶その外に能役者二人、歌舞妓の男一人、女二人控へてゐる。笛、鼓

……小田原陣……

の音など聞ゆ。六月二十四日の午前。

秀吉。(侍女に酌をさせながら)あちらではまだ舞うてゐるな。見物は誰々ぢや。

松の丸。先づ徳川殿を始めとして、前田殿、織田殿、毛利どの、島津どの、みな打揃うて御見物でござりまする。

秀吉。織田ごのは格別ぢやが、徳川や前田は律義者、島津や毛利は遠國者、都の舞の手振がめづらしいので、顔の紐をほぎいて眺めてゐるのであらう。は、それも陣中の好い保養ぢや。飽きるほど見せてやれ。

松の丸。今日は伊達どのお逢ひ下さりまするか。

秀吉。む、政宗のことは忘れてゐたのではない。窮命のために底倉の谷底へ追ひやつて、暫らく其儘にいたした置いたのぢやが、そなたの訴訟によると、彼の主従は住む家もなく、食ふ物もなく、やがては乾干にならうといふ。思へばそれにも不憫ぢやで、兎もかくも召出して逢うて遣らう。政宗には淺野から昨日申渡してある筈ぢや。

松の丸。いよく御對面を許されました、彼の人々もさぞ喜んで居りませう。

秀吉。それが糠喜びにならうも知れぬ。政宗を赦すか赦さぬかは、彼めに對面してからのことぢや。

松の丸。では、御赦免の御召出しではござりませぬか。

秀吉。勿論のことぢや。ごんな奴か、先づ其面附を見た上で、秀吉が直々に吟味して、その申譯が立てば格別、左もなくば生かしては置かれぬ。政宗に取つては一期の浮沈ぢや。彼にもそれほどの覺悟はあらうよ。

(下の方の縁づたひに、石田三成、増田長盛、長束政家、いづれも社袴にて出づ。)

石田。歌舞妓踊拜見つかまつりました。

秀吉。は、面白かつたか。

増田。殊の外面白う拜見いたしました。

長束。陣中で毎日期様な保養を致さうとは、まことに案外でござりました。

……小田原陣……

秀吉。(笑ふ。)誰もさう云うてる。城方の奴等がいかにも藻掻いたとて狂うたとして、かうして隙間なく取圍んだ上は手も足も出るものでない。予の見積りでは先づ半年の命ぢや。さう決つてゐれば急ぐにも及ばぬ。あせるにも及ばぬ。陣中には能狂言、歌舞妓の役者どもを召しあつめて、貝鐘や、関の聲の代りに、毎日笛太鼓や鼓のしらべで面白う囃し立つる。これが今度の城攻めの軍法ぢや。小田原の奴原も膽を挫かれたであらうよ。

石田。仰せの通り、軍といへば貝鐘や鐵砲の音とのみ心得てゐる敵の者どもは笛太鼓の城攻めに定めて驚かされてゐるのでござりませう。

(笛鼓の音やむ。)

松の丸。囃子の音がやみました。もう中入りになつたと見えます。

歌舞妓の男。では、わたくし共も次の支度に取りかゝらねばなりません。

秀吉。この次は何ぢや。

歌舞妓の女一。業平の海道下りでござりまする。

秀吉。(笑ふ。)あまり珍しうもないな。

歌舞妓の二。毎日のこととござりますれば、自然おなじことを繰返すやうにも相成りまする。

秀吉。予には珍しうはないが、餘の客人は珍しいかも知れぬ。精出して舞うて見せい。

三人。はあ。では、御免くださりませ。

(歌舞妓の者三人は一禮して下の方に去る。)

秀吉。(酒を飲みながら。)淺野はまだ戻らぬか。

石田。まだ見えませぬ。いづ方へお遣はしに相成りましたか。

秀吉。昨夜政宗のところへ使者につかはし、今朝も迎へにまゐつた筈ぢや。

増田。いよく政宗をお召出しと決着いたしましたか。

石田。(不満らしく。)して、それは淺野の訴訟でござりまするか。

秀吉。いや、淺野も淺野ぢやが、あのまゝにいつまで捨置てもあまりに不憫ぢ

やと、松の丸がしきりに訴訟するので、兎もかくも今日呼び出すことにした。
長束。直々に御吟味遊ばしますか。

石田。但しその吟味をわれくに仰せ付けられますか。

秀吉。予が直々に吟味する。その方ごもは傍で聽いて居れ。

三人。はあ。

松の丸。それにしても餘りに遅刻いたしては、上様の御機嫌も如何、誰ぞ重ねて御使者をおつかはしなされては……。

石田。さあ。(澁つてゐる。)

秀吉。いや、急ぐにも及ばぬ。浅野がまるつてゐるからは、やがて召連れて来るであらう。

石田。(能役者に。)これから大事の御吟味ぢや。何事が起らうも知れぬ。お身達は御遠慮申されい。

能役者。はあ。

石田。(能役者二人は一禮して下の方に去る。)

政宗は御存知のいたづら者、この期に及んで何か故障など申立てゝゐるのではござりますまいか。

秀吉。まさかそんなこともあるまい。まあ、待て。

(秀吉は酒を飲んでゐる。下の方の庭口より浅野長政は藤井彌助と家來二人を連れて出づ。)

浅野。伊達左京大夫政宗、召連れましてござりまする。

秀吉。すぐにこれへ呼べ。

浅野。はあ。

(藤井に指圖すれば、藤井は下の方に去る。浅野は家來に持たせたる床几に腰をかける。やがて藤井に案内されて、伊達政宗出づ。
記録によれば、この日の政宗の装扮頗る異様なりしが如し。紅白金銀の太き元結にて茶筌髪をまきあけ、左右の鬘の毛を不動のやうにくるくると縮らせ、

身には白の生絹に太き霞を金と紅とにて幾條にも彩りたる帷子を着し、豹の皮の法眼袴を穿くとあり。

淺野。關白殿下の御前でござるぞ。

政宗。はあ。

秀吉。苦しうない。これへまるれ。

政宗。はあ。

(政宗は行きかけて心づき、指したる刀を藤井に渡し、縁にのほりて下の方に坐す。人々は眼をあつめて其の異様な扮装を見る。)

秀吉。政宗。

政宗。はあ。(平伏す。)

秀吉。顔をあげい。

政宗。はあ。

(政宗は頭をあげて、秀吉と顔を見あはせる。)

政宗。今日のお召出し、政宗身に取りまして冥加至極に存じまする。

秀吉。その方は何歳になる。

政宗。二十四歳にござりまする。

秀吉。何歳で家督を嗣いだな。

政宗。十八歳の春でござりまする。

秀吉。十八歳で家督をついで、それから六年の間に會津を討ち、佐竹を破り、

最上を追ひ込み、謙信以來の名家といふ上杉と戦うて一度も不覺を取らず、若い

には似合はぬ鋭い軍配ぢやな。

政宗。過分の御賞美、恐れ入つてござりまする。

秀吉。併し褒めてばかりはるられぬ。今日其方を呼び出したは吟味のためぢや。當方より問ひ糺すこころ一々明白に返答せねばならぬぞ。

政宗。はあ。

(秀吉は三十郎を見かへれば、三十郎は心得て、傍の棚の料紙箱より目安書

……小田原陣……

一通を取り出して秀吉にさしぐ。
秀吉。石田に讀ませい。

石田。政宗、上意でござるぞ。
政宗。はあ。

石田。(よみ上げる)一、當御陣御發向の儀は、去暮を以て仰せ出され候ふ。會津仙道勢の儀は、二月下旬宇都宮まで後詰尤もの由、これ又相觸れられ候ふ。然るところに、政宗、六月にいたり参向の條、御軍令勿諸の初終、口惜く思召され候ふ事。

秀吉。さうぢや、政宗。それに就て申譯あるか。

政宗。申譯は一々ござりまする。但し此期に及びて長々しき申譯を御聽取り下さりませうか。

淺野。御聽取り下されうと思召せばこそ、斯様に御召出しにも相成つたのでござる。

若到延引の儀に就ては何か格別の仔細あるか。手筈相違ならば相違の次第を唯眞直に申上げられい。不束ながら長政も然るべく御取りなし仕つるでござらうぞ。

政宗。お心添へ忝けなう存じまする。然らば政宗、御前に於て一應の申開き仕つる。方々もお聴きくだされ。御承知のごとく、會津は山に圍まれ、雪に埋められたる邊鄙の土地でござりますれば、上方のことは風が吹くやら雨が降るやら一向に判りませぬ。したがつて關白殿下御發向のことも夢にも存ぜず打過ぎました。

石田。白々しいことを云はるゝな。關白殿下が當小田原へ御發向の儀は、唯今この目安書にても讀みあけたる通り、去年の十二月已に仰せ出されてござるぞ。

政宗。如何にもその御日附は十二月五日とござりましたが、前にも申す邊鄙の土地でござりますれば、それがしの手許に到着いたしましたるは當年三月の下旬で、二月下旬に宇都宮までといふ御陣觸れには最早一月ほごも後れて居りました。

石田。 それにしても早々に人馬を整へ、なぜ一日も早う着到せられぬぞ。會津がいかにも邊鄙と申しながら、これまでの道中に足かけ三月とは餘りの延引でござらうか。

政宗。 その御不審も會津といふ土地を御存知なければこそ。くどくも申す通り、往來不便の山國でござれば、雪解を待つてやうく出發いたしましたるは、四月の十八日でござりました。しかも此の遠路を多人數で上りまするは何分にも難儀、殊に御人數に御不足もおはすまじと存じましたれば、内々の者ばかりを引連れて、たゞ御目見得として罷り出でましたる次第、お察しください。白河より宇都宮へ眞直にとは存じたれど、奥州街道には敵の城々が支へて居りますれば、よんどころなく米澤より越後に出で、信濃へかゝり甲斐に入り、駿河より伊豆へまはり、初めて當國まで無事に着到いたしてござりまする。國を越ゆること七箇國、道程はおそよ百五十里、あまつさへ途中の關所關所にて二日とどめられ、三日押へられ、五十日ほどの日數を費してこれまで参り着きましたる艱難辛苦、これ又お察

しくださりませ。

(人々聞き終りて顔を見あはせる。)

淺野。 なにさまこれは無理ならぬこと。奥州街道はみな敵地、二倍三倍のまはり路して、やうくこれまで辿りつきたる艱難、いくへにもお察し申すぞ。

松の丸。 上方から東海道を下るさへも長い旅ぢやと思つて居りましたに、奥州の果から國々を廻りまはつての道中は、さぞや難儀でござりましたらう。なう、淺野どの。

秀吉。 淺野は格別、女子なごが此事に口出し無用ぢや。黙つてゐやれ。先それで着到延引の申開きは一通り相立つた。(石田に。)さて第二ヶ條の目安を讀んで聞かせい。

石田。 はあ。(再び讀みあける。)一、會津義廣儀は、一兩年前より家老金上遠江代官として上洛つかまつり、御禮申上げ、御隨身のものと罷り成り候ふ。その實父佐竹儀も同然の體にこれあり候ふ。然るに政宗、その會津を討取り、佐竹

と合戦つかまつり、あまつさへ義廣居城黒川へ引移り、自身居城として罷りある由、最も慮外に思召され候ふ事。

秀吉。(呪む)政宗、これは大事の儀ぢや。確と返答いたせ。會津の若名義廣は先年より秀吉に隨身して、無二の忠節を勵むべき旨をたしかに誓約いたした者ぢや。その會津を妄りに打ちほろぼして、居城も領地も乗取るなど重々の不埒、秀吉に對して弓ひくも同然とは存ぜぬか。其方は誰に許されて、左様な不埒を働いたぞ。

政宗。恐れながらそれにも仔細ござりまする。政宗の家中にて大内備前と申す者、俄に逆心をいだいて會津に奉公つかまつりました。それを其儘に捨置きましては、一家中の取締りも相立たず、弓矢の瑕瑾にも相成りますれば、會津の若名家に對して、右掛合に及びましたる處、不法の事のみ云ひ募り、あまつさへ佐竹、會津、岩城の三家は年來の好みを忘れ、彼の大内備前に助力するばかりか、その手引にて當家を押傾けんとも企てました。これが合戦の抑もの起りでござりまする。

る。政宗幸ひに武運にかなひ、摺上の一戦にて難なく會津の城を追ひ落し、米澤より彼處に移り住みましたれど、これは弓矢の上として是非もなき次第、殿下に對したてまつりて弓をひくなごとは存じもよらぬ儀でござりまする。

秀吉。むし(考へる)これも一通りは申開きが相立つたやうにも思はるゝが……。彈正、その方の意見はどうぢや。

淺野。唯今の申開きは至極道理のやうにも聞えまする。主にそむきし家來に助力し、あまつさへ其家をかたむけんと企つる以上、政宗ならずとも其儘には打捨て置かれますまい。それがために一戦に及び、運拙うて會津が落城したるは、軍の習として是非もない儀かと存じられまする。

秀吉。治部少輔はどうぢや。

石田。はあ。(考へる)淺野の申す如く、政宗の申開き一應は道理にあたつて聞えまするが、所詮は本人の片口で、相手方の會津は勿論、佐竹、岩城の者どもをも確と吟味いたしましたる上ならでは、理非曲直は定め兼ねるかと思はりまする。

秀吉。

増田、長束の二人はどうぢや。

増田。

唯今の申開きは勿論本人の片口ではござりまするが、さりとして差當つては外に詮議の仕様もござりませぬ。

長束。

兎もかくも此のたびは政宗の申開きを一應聞しめされ、後日に理非の分明したる節に、あらためての御吟味が然るべきかと存じまする。

秀吉。

こゝにある奉行四人の中で、三人が其意見があれば、今日の吟味は先づこれだけに致して置かうか。

石田。

(不満らしく。)これで御吟味は相済みましたか。

秀吉。

濟んだとも云はれぬが、この上に吟味の仕様もないやうぢや。政宗、杯を遣はさうか。

政宗。

ありがたく頂戴つかまつりまする。

(秀吉は侍女を見かへれば、侍女の二人は起つて政宗の前に杯を運び、政宗は一禮して杯を受ける。)

秀吉。

政宗。

政宗。

はあ。

秀吉。

その方が今日の扮装は不思議ぢやな。(笑ふ。)織田信長どのは異風を好まれて、予もかねて見慣れてる。いや、織田殿ばかりでない。この秀吉も異風を好んで、さまざまの趣向を凝らす方ぢやが、今日の其方の扮装は眼ざましいぞ。随分思ひ切つたる體たらくぢやな。奥州では左様な風俗が流行るか。

政宗。

これは政宗が家代々の風俗、世には伊達風俗とか申傳へてをりまする。

秀吉。

伊達風俗……。なるほご風流で面白い。たとひ家代々の風俗にもせよ、左様な不思議な姿をして、秀吉の面前へ憚りもなく出て来るものは、おそらく日本中に二人とあるまい。なか／＼膽の太い奴ぢや。年は二十四とか申したな。

政宗。

はあ。

秀吉。

二十四ではまだ先が長いな。秀吉は今年五十五歳、其方とは親子の相違ぢや。就ては秀吉、息のある間に天下を一統したい望みがある。其方が切取つた

出す。)

政宗。重々の御恩、あらためて御禮申上げまする。(薙刀を押しいたゞく。)

秀吉。(坐る。其方は今日までに戦場を幾たび踏んだな。)

政宗。十四歳の初陣より三十幾度かとおほえて居りまする。

秀吉。年の割には場数をかさねてゐるな。併しそれは出羽奥州の片田舎での小

ぜり合で、百姓一揆か小路軍ともいふべきものぢや。いまだ天下の軍といふの

を見たこころはあるまい。國への土産に秀吉が案内して取らさうわ。まるれ。

政宗。はあ。

秀吉。(空を仰ぐ。)ほう、今日も好う晴れたな。眼眩いほどに夏の日が光るわ。

石田。(不安らしく。)して、いづ方へお越し遊ばされます。

秀吉。すぐ其處の裏山ぢや。政宗、來るか。

政宗。お供いたすでござりませう。然らば唯今お供揃ひを……。それ、彌助。

浅野。

藤井。はあ。(行きかゝる。)

秀吉。いや、いや、供揃ひなど無用ぢや。予は政宗と二人で行くぞ。

松の丸。たつた二人で……。ほかにお供はござりませぬか。

(人々おどろく中にも、石田はあわてゝ進み出づ。)

石田。上様……。

秀吉。は、氣づかひするな。政宗は予の腹心ぢや。

石田。でも、政宗一人では……。せめてそれがしが御太刀をさゝけて……。

秀吉。その太刀も政宗に持たせてゆく。

石田。え。

(人々は又おどろく。)

増田。仰せではござりますが、まだ籠馴れぬ荒鳥でござりますれば、今しば

らく伺ひ狎しませいで……。

長束。まして彼一人のお供なごは……。

……小田原陣……

秀吉。は、騒ぐな、騒ぐな。三十郎、太刀を持て。

三十郎。はあ。

(掛けたる太刀を秀吉の前に持つて出づれば、秀吉は政宗に渡せといふ。三十郎は少し躊躇しながら政宗の前に持つてゆく。政宗は袖にてその太刀を押いたゞく。)

政宗。御袷紗はござりませぬか。

(三十郎は引返して、棚の上より袷紗を持つて来れば、政宗は袷紗にて太刀の鞘を持つ。)

政宗。然らばお供……。

秀吉。まるれ。(起ちあがる。)

浅野。せめて我々が山の下まで……。

秀吉。いや、それにも及ばぬ。

松の丸。でも、上様……。

石田。上様……。

(石田と松の丸は甚だ不安の體にて、左右より秀吉の袂を控ゆるを、秀吉は笑ひながら振拂ふ。人々も不安ながら敬禮す。)

(二)

同じく裏山。前の陣屋よりは一段高きところにて、杉の大樹生ひ茂り、その木立の間より相模灘見ゆ。沖には兵船かゝれり。そこらには藪又は夏草しけりて、大いなる捨石、切株などあり。上の方よりこゝへ登るべき坂路あり。浪の音遠く、その間に蟬の聲もきこゆ。

(上の方の坂路をのほりて、秀吉は以前の姿にて出づ。あとより政宗は太刀をさゝけて出づ。)

秀吉。政宗。なぜ遅い。其方は若い者でないか。

……小田原陣……

政宗。 はあ。上様には存外にお健かでござりまするな。

秀吉。 登る間は少し暑いが、こゝまで来れば涼しい風が海から吹いて来る。あれ、見い。あれが相模灘ぢや。

政宗。 はあ。こゝらは滅多に人の通はぬところと見えまするな。

秀吉。 平生は狐狸の棲家であらうよ。この通りに木立も深い、草も深い。勿論、あたりには人も居らぬ。(笑ひながら)政宗。其方が明智のやうな慌て者であつたらば、この邊は秀吉の首を狙ふには好い場所ぢやな。はゝゝゝゝゝゝ。

(政宗は無言にて頭を垂れてゐる。)

秀吉。 政宗。暑い。額には汗が滲んでゐるぞ。これで拭け。

(秀吉は懐ろ紙を出してやる。政宗はうけ取りて額を拭く。)

秀吉。 まあ、こゝらで休め。(捨石に腰をかける。)これへ来て見い、これが天下の軍配といふのぢや。

(秀吉は下の方の奥を指さす。政宗はひざまづきて瞰下してゐる。)

秀吉。 どうぢや。眼がましいものであらうが……。

政宗。 まことに恐れ入つてござりまする。して、これほどの大軍はおよそ何ほどの人数でござりまするな。

秀吉。 見積りは付かぬか。

政宗。 三十幾萬人とか承はつて居りまするが、逆も我が眼では見積りが出来ませぬ。

秀吉。 さうであらう。秀吉が今教へてやる。

(秀吉は傍の竹を折りて正面を指し示せば、政宗も我を忘れて伸びあがる。)

秀吉。 (起つて説明する。)先づあの海に浮ぶ兵船は千五百艘。

政宗。 (熱心に聴く。)千五百艘……。

秀吉。 その千五百艘の水軍は、南海四國のものどもで、大將は長曾我部、加藤、九鬼、脇坂ぢや。

政宗。 その渚に陣を構へて居りまする桐の御紋の幕張は……。

……小田原陣……

秀吉。あれは予が一族の長谷川藤五郎ぢや。(下の方を指す。)それにつゞくは安房の里見、上總の千葉などの一黨ぢや。こなたにつゞく五本骨の金の扇、無地白の旗が徳川の陣。それから城までの旗幟は畿内中國仙道の勢、左から山手へかけては尾張の織田どのを始めとして東海道の人数。どうぢや、いづれも隙間無しに取圍んでゐるであらうが……。

(秀吉は歩きながら説明する。政宗は息をつめて眺めてゐる。)

秀吉。それからこの真下に見ゆるが九州の諸軍勢、島津、大友、秋月の諸大名ぢや。

政宗。して、北國の諸軍勢は……。

秀吉。北國の前田その他の陣所はこゝからは好う見えぬが、城のあなたの酒匂川を境として、川べりまで薙々と押詰めてゐる。そこには其方が豫て馴染の佐竹もゐる。那須、結城、宇都宮の者共もゐる。およそ日本六十六ヶ國の中で、この陣にまゐらぬものは、壹岐對島の二島と蝦夷松前……。それから……。

(秀吉は持つたる青竹にて政宗を打つ真似をする。)

秀吉。奥州と出羽の半箇國ぢや。(笑ひながら睨む。)横着者め。

政宗。はあ。(頭を下げる。)

秀吉。して、この城の構へは何程か。其方存じてゐるか。

政宗。小田原の城は東西五十餘町南北七十町、其のめぐりは五里とか承はつて居りまする。

秀吉。さうぢや。なか／＼委しいな。

政宗。そのめぐり一間に就て何程の御人数を配つて居られまするな。

秀吉。この間数は一萬八百間、一間につき武者五十騎、雜人三十人ぢや。

政宗。む。(思はず嘆息をつく。)

秀吉。蟻の這ひ出る隙間もないとは、まことに此事ぢや。これで城方の奴原、身動きがなると思ふか。政宗、其方が城方の北條であつたら、今の場合にどうするな。

政宗。 さあ。(考へる。)

秀吉。 好う思案して見い。

(秀吉は政宗にも腰をかけよと指さして、自分は再び石に腰をかける。政宗も切株に腰をかける。)

政宗。 いかにも嚴重の御軍配、斯様に水陸を取切られましたは、仰せの通り、

逆も身動きは叶ひませぬ。但し政宗が城方でござりましたら、やみくくと居縮み

には相成りませぬ。搦手は碓氷峠の絶所を支へ、大手は箱根向ふまで押出しま

して、叶はぬ迄も御敵對つかまつります。

秀吉。 流石は眼の早い若者、軍の仕様を少しは存じてゐるな。併しそれで一度

や二度の小さい勝利はあつても、所詮は半年の壽命を一年に引延ばすだけのここ

で、始終の勝負は知れてあるぞ。由ない小才覺を恃んで身をほろほすな。このた

びの着到に就ても、家來共に異論はなかつたか。

政宗。 はあ。

秀吉。 いや、無いことはあるまい。世間見ずの田舎侍、天下の形勢を何んにも

知らんで、遮二無二敵對など云ひ張つたであらう。それは判つてゐる。眼に見る

やうぢや。それを取續むる其方や小十郎の苦心は、秀吉も好う察してゐるぞ。

政宗。 はあ。

秀吉。 そればかりか、會津百萬石を潔く献上しようといふ、さりとて膽玉の大

きい奴ぢや。其方ごとき者は予が旗本にも少い。よく召使はゞ役にも立つべき者

ぢやと思つて、一切の罪を赦してやる。但し秀吉の首が欲ければ、さつきも云う

た通り、時は今ぢや。太刀は其方に渡してあるぞ。

政宗。 これは思ひもよらぬ仰せ、政宗誓つて左様の逆心をいただきますね。この

後は唯一圖に忠勤を勵みまする。

秀吉。 よい。よい。實心に歸服すれば、行末悪しうは計らふまいぞ。小田原は

遠からず落城、これで其方が歸服すればいよく天下は一統ぢや。やがては高麗

大明の異國までも我手に握る瑞祥と思へば、秀吉取分けて満足に存するぞ。

政宗。かさねん、御懇の御意、唯々恐れ入つてござりまする。

(下の方の草叢より片倉小十郎は矢はり雑兵の姿にて、這ひ出でながらに窺ふ。その草摺れの音に政宗は心づきて見かへる。)

政宗。(小聲であわたとしく)吐つ、吐つ。

(小十郎は草の奥に隠れる。)

秀吉。(横眼に視て)なんぢや。狐でもまるつたか。野良狐めはこれで逐へ。(青竹を出す。)

政宗。いえ、何もまゐりませぬ。

(上の方の坂路をのほりて、浅野長政と石田三成は武装して出づ。)

浅野。これにお出でござりましたか。

秀吉。おゝ、迎へに来たか。

石田。あまりお歸りが後れますので……。

秀吉。成程、いかう暇取れた。政宗まゐれ。

政宗。はあ。

秀吉。陣屋でお茶を遣はさうぞ。

(秀吉は起ちあがる。人々は敬禮す。小十郎は再び草叢より覗ふ。浪の音遠くきこゆ。幕。)

近松門左衛門

登場人物

- 近松 門左衛門
- 平野屋 徳兵衛
- 天満屋 お初
- 竹本座 の手代
- 茶屋 の女

場所。泉州堺の茶屋。

(近松門左衛門、六十八歳。海を見晴らしたる小座敷にて酒を飲んでゐる。享保五年十月十一日の夕。)

近松。 あゝ、酔つた、酔つた。おれは下戸だが、それでも二杯や三杯の酒で、

こんなに酔つたことはめづらしい。酔醒の故か、忌に薄ら寒くなつて来た。(お初と徳兵衛出づ。世にありし時と同じ姿なり。)

近松。 ごなただす。女中も氣が利かない。もう暮れかゝつたら早く燭臺でも持

つて来ればいゝのに……。薄暗くてよく判らない。どうぞ此方へお進みください。二人。 御めん下さい。

近松。 さあ、どうぞ。

徳兵衛。 先生は近松門左衛門様でございますか。

近松。 はい。わたしは門左衛門です。

お初。 わたくし共は十七年前に先生の御厄介になりました者でございます。

近松。 はあ、どなたでしたか。年を取りますと、どうも記憶が薄くなりまして、どなたにも失禮を致してなりません。

徳兵衛。 いえ、お見おほえのないのも御道理でございます。かねてお名前はうけ

……近松門左衛門……

たまはつて居りながら、お目にかゝるのは今晚が初度でございますから。わたくしは大阪平野屋の手代徳兵衛と申すものでございます。

お初。わたくしは曾根崎天満屋の初と申します。

近松。(考へる。)はて、聞いたやうな。

徳兵衛。もうお忘れになりましたか。

近松。さあ。(又考へる。)徳兵衛……お初……はてな。

お初。まだお考へ付になりませんか。わたくしは曾根崎からまゐりましたので

ございます。

近松。曾根崎……。あ、判つた。判りました。平野屋徳兵衛、天満屋お初、曾

根崎心中……。もう遠い昔のことですね。なるほど、もう十七年になりますか。

さうすると、わたしが五十一の年……。いや、自分でもすつかり忘れてるました

よ。

徳兵衛。あなたは度々のことですから、もうお忘れになつてゐるかも知れません

が、わたくし共に取つては一生に一度のことですから、忘れやうとしても忘れられ

れません。

近松。(氣の毒さうに。)御道理です、御道理です。

お初。わたくし共を振出しに、あなたも随分いろくの心中をお書きになりましたね。

近松。

さうです。一々はおほえてるませんが、随分書いたやうです。

徳兵衛。(皮肉らしく。)その度ごとに操りは大當りで結構でございます。

近松。(柔順に。)はい。いつも仕合せと評判が好いやうです。

お初。あゝいふ心中物は、先生が好んでお書きになるのでございますか。それ

とも竹本の方からの註文でございますか。

近松。(躊躇する。)さあ、色々ですね。

徳兵衛。さうすると、あながちに註文ばかりでもないのでございますね。

近松。さうです。

徳兵衛。それならば如何でせう。心中物なごをお書きになるのは既うお止めになりましては……。實は今晚はそれをお願いに参りましたのですが……。

近松。(しづかに。)書いてはいけませんか。

お初。あなたは地獄へ墮ちますよ。

近松。(矢はり冷静に。)さうでせうか。

徳兵衛。あなたは平氣でゐらつしやるが、ほかの者が迷惑します。現にわたくし共が長年の間、大變に苦しんでゐます。

近松。なぜですか。

徳兵衛。まあ。お聴きください。わたくし共は若い同士の無分別で、曾根崎心中のうき名を流してしまひましたが、死んだ後では非常に後悔してゐます。どうかして地獄から極樂へ生れ變りたいと切りに祈つてゐるのです。

近松。あなた方は地獄へ行つたのですか。

お初。(瞋るやうに。)勿論ですとも……。あなたは筆の先で「未來成佛うたがひ

なき、戀の二本となりけり」などと、都合の好いことをお書きになりましたけれど、心中した者が極樂成佛など出来るものですか。二人ともに直に地獄へ送られてしまつたのです。

近松。なるほど。(嘆息をつく。)それはお氣の毒ですね。

徳兵衛。そこで、地獄の鬼の云ひますには、おまへ達が不埒な心中をして、それを又、近松門左衛門といふ不埒者が淨瑠璃に書いて、曾根崎心中などと世間に擴めたので、その以來、心中をする不埒者が無暗に殖えて來た。近松も無論悪いが、おまへ達も悪い。世間に心中の種を播いたものは、おまへ達と近松だ。それだけでも極樂へ遣ることは出来ないに申します。

近松。(矢はり冷静に。)さうですか。

お初。それをわたくし共が色々に嘆きますと、鬼の眼にも涙といふのでせうか、少しは不憫を加へてくれまして、おまへ達がいくら嘆いても頼んでも、今すぐに極樂へ遣る譯には行かないから、もう少しの間は地獄に辛抱してゐろ。その中に

はお前達の罪業もだんぐ軽くなつて、極樂へ行かれる時節が無いでもない。その積りで、せいぐ罪業消滅を心掛けろと親切に教へてくれましたので、わたくし共も思はず手をあはせて拜みました。

近松。 それは結構でした。

徳兵衛。 ところが、些とも結構ではないのです。先生、あなたは随分ひどい人です。

近松。 ひどい人……。なぜでせう。

徳兵衛。 わたくし共の心中が大當りに當つたので、それに味を占めて、あこから後からと續けて心中物をお書きになる。それに唆かされて、心中はますます流行る。さうして、地獄へ墮されて来る者が一年ごとに殖えて来る。お房徳兵衛、お島市郎右衛門、おかめ與兵衛、お梅桑之助、おきさ次郎兵衛、小かん平兵衛、おさが嘉平次、それからそれへと繋がつて地獄へ送られて来るので、その度ごとにわたくし共は悚然とします。それもみんなあなたの爲です。

(近松は黙してゐる。)

お初。 前にも申す通り、わたくし共は明けても暮れても罪業消滅を祈つて、一日も早く極樂へ行きたいと念じてゐるのに、あなたが相變らず淨瑠璃を書いて、無暗に心中を流行らせるので、わたくし共の罪はどうしても消えませんが。畢竟おまへ達があんな種を播いたから、心中して地獄へ墮されるやうな不埒者が殖えて来たのだと云ふので、わたくし共の罪は軽くなるどころか、一年増しに重くなるばかりで、だんぐに地獄のどん底へ追ひ落されてしまひます。この分では彌勒の世まで浮む瀬がありさうにも思はれません。

徳兵衛。 まつたくお初のいふ通り、世間に心中が殖えれば殖えるほど、わたくし共の罪はだんぐ重くなるばかりで、實に遣瀬がありません。先生、お察しく下さい。わたくし共は名聞のために死んだものではありません。勿論、世間に心中を流行らせやうなぞと、夢にも考へてしたことではありません。それを流行らせたのはあなたの故です、竹本の芝居が金儲けをしたい爲です。その連坐を食つて、

わたくし共の罪が重くなるといふのは、あんまり情ないではありませんか。いや、情ない、悲しいを通り越して、實に涙も出ない位です。くどいやうですが、先生、お察してください。

近松。實にお察し申します。さう承まはると、まったくお氣の氣です。併しわたしは決してそんな料見で心中物を書いたものではありません。

お初。でも、それから心中が流行り出したことは、あなたも御存知でせう。

近松。それからといふ譯でもないでせうが……。

お初。卑怯なことを云はないで、正直に仰しやい。兎も角もそれから心中が殖えたのは本當でせう。

近松。まあ、さうかも知れません。

お初。それからあなたは御存知ですか。竹本の筑後様も地獄に墜ちて苦しんでゐますよ。

近松。義太夫の筑後様、あれも地獄へ墜されましたか。(考へる。)なぜだらう。

さうも判らないな。

お初。あなたと一所になつて心中を流行らせて、さんく、金儲けをしたんですもの。その位のことでは當りまへではありませんか。さう考へても、わたし達こそ好い面の皮です。現世でさんく、泣かされて、來世ではあなた方のために地獄のどん底へ押込まれる。まったく泣いても泣き足りない位です。先生、あなたも人情があるならば、もうこゝらでわたし達を助けてください。

近松。助けてあげたい。わたしも全く救つてあげたい。わたしはおまへさん達ばかりでなく、すべての人達を救つてあげたいと思つて、尊い坊さんと同じやうな心持で筆を執つてゐる。わたしはおまへさん達の地獄の苦しみを唯見物してゐるやうな不人情な人間ではない。わたしは人一倍に涙がある積りだ。

徳兵衛。それなら猶のことです。さうぞわたくし共を助けてください。一日も早くわたくし共を地獄から救ひ出してください。約りあなたがこれから心中物を書

かないやうにして下されば可いのです。心中を流行らせてさへ下さなければ可いのです。さうすれば自然にわたくし共の罪の重荷が軽くなります。わたくし共ばかりではありません、あとから来たお島も市郎右衛門も、おかめも與兵衛もみんな助かる譯です。お慈悲です、お願ひです。どうぞお聞入れ下さい。

(近松は無言。)

お初。(起つて近松の左の方に来る。)先生。さうしても肯いて下さいませんか。徳兵衛。(右の方から摺寄る。)先生。御承知くださいませんか。

お初。わたくし共は浮ばれません。徳兵衛。浮ばれません。

(二人は近松の前に青ざめた顔を突き出す。近松は眼をとちて矢はり無言。)
お初。(じれる。)先生。これほごに云つても、まだお判りになりませんか。

近松。まあ、お待ちなさい。心中を流行らせたのはわたしの罪ではない、この世の中の罪です。わたしが心中物を書かないとしても、此世の中が改まらなければ

所詮心中は絶えませんが、世に盗人の種が盡きないと同じことですよ。それを思ふと、わたしは實に悲しい。わたしは何うしても書かなくてはゐられなくなるのです。

お初。あなたがこゝで何と理窟を云つても、地獄の世界では通用しません。あのやうな人には、いくら云つて聞かせても判りさうありませんから、もう寧ろそのこと、地獄へ来て御覽なさい。

近松。え。

お初。地獄へおいでなさい。さうして、實地に地獄のありさまを御覽になつたら、成程と合點が行くでせう。さあ、おいでなさい。すぐにお出でなさい。

近松。いや、まあ、待つて下さい。

お初。いゝえ、待たれません。一刻も待たれません。すぐにおいでなさい。わたしはあなたを地獄へ連れて行きます。

近松。いや、いけない。わたしはもう七十近い人間だが、まだ四五年は生きて

……近松門左衛門……

みたい。

徳兵衛。 それでは先生。わたくし共のお願いを肯いて下さいますか。

近松。 ごうも困るな。まあ、少し考へさせてください。

徳兵衛。 屹と考へて下さいますか。

お初。 今更考へることはありませんまい。心中物を止めるか、地獄へ行くか、二つに一つの返事をすれば可いのです。

徳兵衛。 まあ、お前のやうに急いても不可い。先生のやうなお人はよくゆつくりとお考へにならなければなるまいから。

お初。 でも、あんまり焦つたいんですもの。

徳兵衛。 まあ、可い。では、先生。お考へくださいますか。

近松。 考へませう。

お初。 なるだけお早く願ひます。

徳兵衛。 では、今晚はこれで失禮いたします。

お初。 くだいやうですが、よくお考へください。

近松。 はい、はい。

徳兵衛。 ごうもお邪魔をいたしました。

(お初と徳兵衛は消ゆるが如くに去る。)

近松。 おや、あの二人はいつの間にか何處へか消えてしまつた。どうもみんな勘違ひをしてるので困る。いや、それも無理もないかも知れない。おれもこれからは時代物ばかり書くかな。(考へる。)なんだか寂しい。もう少し酒でも飲んで見ようか。

(近松は手を叩かうとする時、茶屋の女は燭臺を持ち出て出づ。)

女。 あの、大坂からお人が見えました。

近松。 大坂から……。すぐに通してください。

女。 はい、はい。(引返して去る。)

近松。 大坂から誰が来たかしら。竹田出雲でも遊びに来たかな。

……近松門左衛門……

(竹本座の手代出づ。)

手代。先生。

近松。やあ、これは……。

手代。お宅の方へあがりますと、生憎にこちらへお出でになつてゐると云ふこととで、すぐに大急ぎでまゐりました。

近松。大急ぎで……。なにか急用でも出来しましたか。

手代。早速でございますが、昨晚大坂で心中がございまして……。

近松。(ぎよつとする。)心中……。

手代。網島の大長寺の藪際で、小春と治兵衛が心中いたしました。

近松。小春治兵衛……。

手代。女は曾根崎の紀國屋の抱女で、男は天満の紙屋の主人でございます。この頃しばらく心中物が出ませんから、是非今度は先生に書いて頂きたいといふ座元からの註文で、早速お願ひに出ましたのでございます。

近松。心中物ですか。

手代。さうでございます。こゝのところは、先生の御作も本朝三國誌や平家女

護島、島原蛙合戦などといふ時代物ばかり續いて居りますから、こゝらで何うし

ても氣を變へて、心中物の艶つほいとところをお願ひ申したのでございます。

近松。わたしも年を取つて、その艶もだんぐりに失せましたからね。

手代。いえ、なか／＼さうではございません。今度の心中は屹と近松先生が書

くだらうと云つて、大坂中でも既う噂をしてをります位で……。なにしろ丁度お

十夜の晩に心中したといふのですから、餘計に評判が高くなつて居ります。

近松。成程ゆうべはお十夜でしたね。

手代。晝間から時々時雨が降りまして、夜になつては薄月が出ました。

近松。お十夜の晩……時雨……。大長寺の藪際……。(詩興が動いて來る。)あす

こには樋の口の流れがありましたね。

手代。はい。晝間でも寂しい場所でございます。

……近松門左衛門……

近松。むむ。(考へてゐる。)併しどうも此頃は心中物も氣乗りがしないのでね。

手代。そんなことを仰しやつては困ります。座元はかりではございません。大坂中の操り好きが皆んな待ち構へてゐるのでございますから……。今度の心中は近松がどういふ風に書くかと云ふので、みんなが色々の噂を立てゝ居ります。

近松。(再び考へる。)そんなに噂をしてゐますか。

手代。ぐづぐづしてゐますと、鬘竹座の方でも手を着けるかも知れません。海音や一風もこんなことを狙つてゐるのでございますから油断はなりません。あの連中に先手を打たれて、近松は何うしてゐるのかと云はれるのも残念でございますから、是非お早く願ひたいと存じます。

近松。むむ。(又考へる。)海音や一風も手を着けさうですか。

手代。何とも云へません。就ては色々のお打合せもございますから、すぐに大坂へお歸りを願ひたいのですが、如何でございますませう。

近松。(決心して。)よろしい。すぐに歸りませう。

手代。ありがたうございます。では、唯今すぐにお駕籠を用意させてまゐります。御めん下さい。

(手代は早々に去る。近松は床の間から硯箱を持出して、懐ろ紙を膝の上にひろげる。)

近松。先づ道行から書いて渡さないと、太夫の節附に困るだらうな。(考へる。)急いで書くのだから、走り書かな。むむ、さうだ。(紙に書きながら讀む。)走り書……うたひの本は近衛流……野郎帽子は若むらさき……悪所狂ひの身の果は……むむ、可い、可い。

(竹本座の手代再び出づ。)

手代。先生、お待遠さまでございました。お駕籠の仕度は出来ましたから、すぐにお召しく下さい。

近松。では、このあとは駕籠の中で書きませう。
(近松は書きかけた紙を懐中に入れて起ちあがる。幕。)

……近松門左衛門……

大
坂
城

登場人物

速水甲斐守	阿茶の局
真田大助	奥女中 小笹
穴山小平太	侍女 お菊
村上彌六	淀川の 方
伊集院半兵衛	池邊権五郎
茶坊主 休林	

他に侍女、女の童、軍兵など。

第一幕

大坂城の京橋口。平舞臺の正面は堤の心にて、向うには淀川見ゆ。所々に松の立木あり。

(元和元年五月七日の夜半。城の大手口及び玉造口にては合戦の最中とおほしく、陣鐘の音などきこゆ。上の方より真田大助はうしろ鉢巻、陣羽織、籠手脛當の若武者。穴山小平太は松明を持ち、村上彌六は槍を持ちて附添ひ出づ。)

大助。(空を仰ぐ。)暗い夜ぢや。大戦の後には雨ありと云へば、やがて雨にならうも知れまいぞ。

小平太。大戦の後……。(これも空を仰ぐ。)この軍がまだ幾日つゞくでござりませう。

……大坂城……

彌六。 所詮は二日か三日……。いや、もう一日かどうかも知れませぬな。

大助。 いかにもそち達のいふ通り、大坂城の運命も所詮長くは保つまい。父上は討死、われくもやがて冥途のおん供ぢや。とは云ふものゝ、かうして籠城してゐる間は、口々の固めが肝要、正面の敵にのみ氣を取られて、川口の固めを怠つてはならぬぞ。

二人。 はあ。

(上の方より薄衣をかつぎたら侍女風の女が小さき包みを持ち、女の童の手をひきて忍び出づ。)

小平太。(見咎める。)待て、待て。

彌六。 おのれは何者で、いづれへ参る。

(小平太は松明を差付ける。女の童も其處にうづくまる。)

大助。 衣を取れ。

(女はかつぎし衣を取る。)

大助。 よい、よい。行け、行け。

(女は會釋して、女の童と共に早々に下の方へ立去る。)

小平太。(あとを見送る。)落城も近い中と見かぎつて、抜けくに落ちてゆく者が多いやうぢや。

大助。 所詮落城ときはまるからは、女子供老人、さては手負の者共なき、思ひ思ひに退散するがよい。まさかの時に逃げ惑うて、火に焼かれ、馬の蹄に踏みにじらるゝは餘りに無残ぢや。

(上の方より矢はり薄衣をかつぎたる大坊主一人忍び出づ。小平太は進みよりにて松明を差付ける。坊主はうづくまる。)

小平太。 何者ぢや。面を見せい。

坊主。 はい。(躊躇してゐる。)

彌六。 えゝ、早くその衣を取つて見せぬか。

坊主。 はい。

小平太。 え、胡亂な奴。 それ。

(小平太は彌六に眼配せすれば、彌六は衝と寄つて、坊主のかつきし衣を剝ぐ。)

彌六。 そちは茶坊主の休林でないか。

小平太。 御運を見限つておのれも落つるか。

坊主。 恐れ入りましてござります。

大助。 今更となつて詮議は無益ぢや。 落ちたくば落してやれ。

坊主。 ありがたうござります。

彌六。 命が惜くば勝手に駆け。

(彌六は槍の柄にて突き遣る。 突かれて茶坊主は倒れたるが、又さびききて薄衣をかぶり、早々に下の方へ逃けてゆく。)

大助。 唯今も申す通り、女わらべ茶坊主のたぐひ、落ちたくば勝手に落してや

れ。 但し然るべき侍が命を惜み、恥を忘れ、覆面などして落つる者あらば、味

方とて容赦なく斬捨てい。

二人。 はあ。

(水の音。 大助は先に立ち、小平太と彌六との二人は上の方に立去る。 水の音、うすく陣鐘の音。 下の方より薩摩の家來伊集院半兵衛、三十餘歳、帷子の下に籠手を着け、箆笠にて忍び出づ。 つづいて池邊權五郎、おなじ拵へにて權を持ち出て出づ。)

權五郎。 幸ひの雨もやひ、闇にまぎれてこれまで漕ぎ寄せ申した。 流石の關東方もこの川口までは手が廻らぬ見えまするな。

半兵衛。 (笠をぬぐ。) さりとて油断はならぬ。 ぬけ目のない大御所の軍配、城方の逃口を塞ぐために、窃かに人数を配つてあらうも知れぬ。(あたりを見まはす。) いづれにしても城は眼の前、お身はこれより引返されい。

權五郎。 ではござれども、お手前お一人では……。

半兵衛。 (氣忙しく。) いや、いや。 二人が連立つては却つて人目に立つ。 これから

はそれがし一人の役目。お身は舟へ引返して、かねての合圖を相待たれい。

權五郎。(躊躇しながら)それでも切めて城際まで……。

半兵衛。さりとは情の剛い。早く、早く。

權五郎。では、くれぐれも御油断なく……。

半兵衛。なん時にても舟出の用意、ぬかりめさるな。

權五郎。心得申した。(行きかゝる。)

半兵衛。あゝこれ。

(半兵衛は權五郎を呼び止めて囁く。薄く陣鐘の音をりくりに小銃の音もきこゆ。上の方より眞田大助うかゞひ出づ。)

大助。(透し視る。)何者ぢや。

二人。え。(半兵衛と權五郎は躊躇する。)

大助。何者ぢや。早く名乗れ。

半兵衛。さう云ふお手前こそ關東方か、但しはお城の衆か。

大助。(これも少しく躊躇する。)それ聞いて何とする。尋ねられたるお身達より先づ其身分を明かされい。

權五郎。(半兵衛を庇ふやうに進み出づ。)いや、むざとは云ふまい。城方か關東方か、先づお身から名乗られい。

大助。えゝ、いつまでも同じことを……。咎められたら名乗るが法ぢや。おのれ何うでも名乗らぬか。

權五郎。お身の身分を聞かぬ中は、われくも滅多には名乗るまい。

大助。はて、面倒な。敵にもせよ、味方にもせよ、夜陰にこゝらを徘徊するは胡亂な奴、兎もかくも引立てまるるぞ。さあ、歩め。

(大助は先づ權五郎の箆をつかむ。權五郎は持つたる權にて突き退けんとして互ひに争ふ。半兵衛は一足退りて、身構へしながら窺ひる。上の方より速水甲斐守は籠手脛當、陣羽織、家來數人を率ゐて出づ。家來の二人は松明を持つ。)

甲斐。(家來を見返りて。)それつ。

(家來は駈け寄りて大助に力をあはせ、權五郎を引き伏せようとする。權五郎の笠落ちる。)

半兵衛。(簀をぬぎて進み出づ。)あいや、暫らく。其許は速水甲斐ものではござらぬか。

甲斐。いかにもそれがしは速水甲斐。して、お手前は……。

半兵衛。定めてお見覚えもござらう。それがしは……。(云ひかけて、他の家來どもの手前を憚る。)それがしは……伊集院半兵衛でござる。

甲斐。何、伊集院半兵衛……。

半兵衛。(聲を低める。)國訛りでも大方は御推量のなる筈。われくは薩摩の者でござる。

大助。む。さてはお身達は島津殿の……。

甲斐。叱つ。(あたりを見かへりながら、これも小聲になる。)して、その薩摩の

衆が何として参られた。

半兵衛。憚りながらあたりのお人を……。

甲斐。む。(大助等に。)薩摩の衆が何か密談があるといふ。お身達はこゝを遠慮せられい。

大助。(不安らしく。)お身様一人をこゝに残して……。

甲斐。仔細ござらぬ。早う行かれい。

大助。はあ。

(大助は先に立ち、甲斐の家來もついでに上の方に立去る。薄く水の音、家來の一人は松明をかざして甲斐のそばに残る。)

半兵衛。(權五郎を見かへる。)甲斐殿に逢うたれば最早懸念はない。お身も舟へ引取られい。

權五郎。然らば御免ください。

(權五郎は甲斐に一禮して下の方に立去る。甲斐も家來を見かへる。)

甲 斐。密談は暗いがよい。そちも行け。
家 來。はあ。(松明を持ちて去る。)

甲 斐。(立つたるまゝにて)薩摩の衆、近うお進みなされ。
半兵衛。はあ。(進み出て、ひざまづく。)

甲 斐。早速ながらお身達は何としてこれへはまゐられた。島津殿お使かな。
半兵衛。御推量のごとく、島津薩摩守の使として、窃に當大坂表へまかり出でま

したが、軍の模様は如何でござりまするな。
甲 斐。残念ながら一日か二日の御運ぢや。
半兵衛。(忙しく)む、一日か二日……。

甲 斐。先達てよりの戦ひに、真田左衛門佐、木村長門守、後藤又兵衛、薄田隼人、たのみ切つたる人々は跡や先に討死して、口々の固めも皆破られ、難攻不落と世に誇りし大坂城も一日か二日の命。われくの無念、お察し下され。
半兵衛。(嘆息する。)いかにもお察し申上げまする。恐れながら當城の御運の末も

斯くあらんかと懸念のあまりに、主人薩摩守がわれく共を窃に差遣はされてござりまする。

甲 斐。當城の御運を見きはめて、島津殿より窃に御使者を遣はさるゝとは、いつもながらの御芳志、忝けなう存じ申す。して、其仰せ越されたる御趣意は……。
半兵衛。さあ、その趣意は……。(少しく考へる。)何分にも大事の機密でござれば

……。
甲 斐。(うなづく。)いや、これはそれがしの不念ぢや。大事の機密を斯様のところでは申されまい。然らばすぐに城内へ……。

半兵衛。御案内下されまするか。
甲 斐。いざ、お越しなされ。
(半兵衛は箆をかゝへて起ち上り、下の方を見かへる。)

甲 斐。連の家はいづこへ参られた。
半兵衛。連の者はあの川口に……。

甲斐。 川口に……。舟をつないで居らるか。

半兵衛。 それがしの合圖を待つて居ります。

甲斐。 お身の合圖を……。して、その舟は一艘でござるか。

半兵衛。 川口には一艘、沖の方には……。

甲斐。 沖の方には……。

(甲斐は心にうなづく。半兵衛はあたりを配る。陣鐘の音又はけしく、

小銃の音つゞけて聞ゆ。)

半兵衛。(上の方を見る。)お、陣鐘の音、鐵砲の音……。 (あわたしく。)寄手は

勝に乗つて今夜の中にも埒を明けようとするのでござるまいか。

甲斐。 いや、敵は大軍、夜いくさは却つて人数を損ずるばかりぢや。唯をりに鐘を鳴らし、貝を吹き、関を作り、鐵砲を打ち出し、今にも寄せ掛くるやうに見せかけて、味方を疲らす手だてと見ゆる。恐らくまことの總攻は、あすの明方からでござらうよ。

半兵衛。 こは云へ、この頃のみじか夜、やがて二時で東も白みます。夜のあけぬ間に御案内下され。

(半兵衛は忙はして上の方に行きかゝる。)

甲斐。 お心せきは御道理、すぐに御案内申すでござらう。

(甲斐は呼子の笛を吹く。その間も半兵衛は苛々してゐる。)

半兵衛。 御案内に暇取るならば、失禮ながらそれがしはお先へまゐるぞ。

甲斐。 それほどにお急ぎか。

半兵衛。(焦れる。)薩摩の侍の氣風を御存知ないか。いま一時半時が大事の鏑際、一生に二度とあるまい此の役目を仕損じたら、この腹幾つ切つても足りませぬわ。(上の方より真田大助は穴山小平太、村上彌六を連れて出づ。小平太は松明を持つ。)

大助。 唯今の笛は……。

甲斐。 松明に路を照らして、この御仁を案内せられい。

大助。 はあ。(半兵衛に。)いざお越し下され。

半兵衛。 御苦勞でござる。

(半兵衛は心の急くまゝに、甲斐をあとにして大助等と共に上の方へ立去る。この時、上の方の奥にて陣鐘を烈しく打ち立つるに甲斐は思はず屹と耳を傾けしが、やがて半兵衛等のあとを追うて上の方へあゆみ去る。陣鐘の音。幕。)

第二幕

大坂城内、淀の方の居間。一面の平舞臺にて、舞臺の端に白木の高欄あり。上の方へ少し寄せて上段の間。うしろは襖。下の方は次の間の心にて、正面は翠簾をまきあげ、翠簾の外は高欄附の廊下、その外には奥庭見ゆ。舞臺の上の方にも襖あり。前の幕とおなじ夜にて、よきところに燈臺を置く。この燈臺は仕掛にて、あるひは明るくなり、或は暗くなると知るべし。

(上段の間にては、淀の方が鏡にむかひて化粧してゐる。そのそばには奥女中小笹が控へ、ほかに侍女四人が盥その他をさゝけて控へてゐる、うすく雨の音きこゆ。)

淀の方。(化粧の手をやめる。)雨の音が聞ゆるやうぢやの。

小笹。(耳を傾ける。)ほんに雨の音が聞えます。この頃の習、また降り出したと見えます。

淀の方。 更けても何やら蒸暑いここぢや。小笹、かき上げてたもれ。

小笹。 はあ。

(小笹は櫛を持ちて淀の方のうしろに廻り、その髪をかき上げる。下の方の廊下傳ひに侍女お菊出で、次の間にて手をつく。)

お菊。 申上げます。

小笹。 何事でござりまする。

お菊。 茶白山の御陣よりお使者にござりまする。

小 笹。 茶臼山よりのお使者とは……。いづれにしても、こゝへ取次ぎには及ばぬこと。大野殿、速水殿、それらの人々にお傳へなされ。

お 菊。 いえ、お使は阿茶の局。御母公様に是非ともお目通りを願ふとのことでござりまする。

小 笹。 おゝ、阿茶殿……。淀の方の氣色をうかゞふ。如何取計ひませうか。

淀の方。 何、阿茶の局が参つたとか。逢ひませう。これへ案内しや。

小 笹。 それ、御案内……。

お 菊。 かしこまりました。

(お菊は會釋して立去る。)

小 笹。 お使者に御對面とござりますれば、お召換へ遊ばされまするか。

淀の方。 勿論のことぢや。籠城の苦勞に屈托して、取亂したる姿を見せたりなどと、後日の沙汰も口惜しい。阿茶は甲州の田舎侍の娘、今川が家來の妻なれど、今は京都から二位の位を許されて、局と名乗る身の上であれば、敵ながらも相當

の會釋が無うてはならぬ。衣服をあらためて面會するほごに、兎も角もこれへ通して置きやれ。

小 笹。 はあ。

(淀の方は起つて奥に入る。侍女どもはそこらを片附けて、同じく奥に入る。小笹も衣紋を繕ひて下の方にゆき、局の來るを迎へる。廊下づたひに侍女二人が雪洞を持ちて先に立ち、つゞいてお菊が阿茶の局を案内して出づ。局は六十歳、男まさりの老女、緋の袴。そのあとにも侍女二人附添うて出づ。)

お 菊。 すぐにあれへお通り下さりませ。

阿 茶。 御めん下され。

(局は案内されて平舞臺の上座に直る。)

小 笹。 夜中のお使者、御苦勞に存じまする。御母公様唯今お逢ひなされまする

ほごに、しばらくこれにお控へ下さりませ。

阿 茶。 して、御母公様には御機嫌よろしうござりまするか。

小 笹。(少し躊躇して。)はい。
阿 茶。(微笑む。)いつもの御疝性やらお瘰氣で、おむづかりではござりませぬかな。

小 笹。いえ、そのやうな儀は……。

阿 茶。無ければ重疊。お傍の衆の御苦勞も嘸かしとお察し申しまするぞ。

小 笹。恐れ入つてござりまする。それ、お腰元衆。お使者にお茶の御仕度を……。

侍 女。かしこまりました。

(侍女四人は會釋して下の方に立去る。雨の音うすく聞ゆ。)

阿 茶。そちらの若いお女中は、たしかお菊殿と申されましたな。

小 笹。左様でござりまする。よう覚えておるでなされまするな。

阿 茶。おほえて居りまする。これ、お菊ごの。

お 菊。はい。

阿 茶。(打解けて。)去年の冬御陣の時、この婆ご歌物語したこと覚えてござらう。

お、矢はりこのお座敷ぢや。御母公様のお逢ひを待つ間、こなたがわたしの相手をして、面白い歌の話など聞かして下された。(小笹に。)喃、それでわたしはよく覚えて居りまするのぢや。

お 菊。その時にはまことに失禮をいたしましたしてござりまする。

阿 茶。いや、いや、弓や鐵砲の軍最中に風流な歌物語、面白いこゝでござつたよ。こなたは年の若いにも似合はず、歌も上手、文も上手ぢやと聞いてゐる。かうした籠城の忙しい間にも、何か書かれて居られまするか。

お 菊。何や彼やに取りまぎれて、その日その日の日記すらも思ふやうには書かれませぬ。

阿 茶。(うなづく。)勿論お忙しいことであらう。したが、その忙しい間に一筆でも書き留めて置くと、我ばかりかは、人の爲にもなる。過ぐる關ヶ原の軍の折に、大垣の城内にゐたおあんといふ女子が、自分の見たこと聞いたことを物語のやう

に書き付けて置いたを、誰が云ふとも無しにおあん物語といひ傳へて、この頃世間で持て囃して居ります。どうぢや、お菊どの。こなたも去年と今年と二度の籠城、その間のことを偽りなく書き付けて、お菊ものがたりとでも名を附けてはごうぢやな。屹と面白いものが出来ませうぞ。

小 笹。 ほんにさう云へば、お菊ごのは此間から何か忙がしさうに書いてゐる様子ぢやが、それがお局の仰しやるやうな、お菊物語とやらでござりまするかえ。

お 菊。(恥かしさうに。)いえ、其のやうなものではござりませぬ。

阿 茶。(いよく笑ましけに。)おゝ、それではもう何か書いてござるのか。今度の軍がめでたう納まつたら、どうぞわたしにも見せて下され。よいかな。

お 菊。 ぎう致しまして……。おまへ様方のお目にかけるやうなものではござりませぬ。

阿 茶。 はて、遠慮には及ばぬ。そのお菊物語が出来たらば、屹とわたしにも見せてくだされ。

お 菊。(迷惑さうに。)はい。

阿 茶。(笑ひながら。)今から約束しましたぞ。

お 菊。 はい。

(この時、奥の襖をあけさせて、淀の方は衣服を着換へて出づ。侍女どもは其のうしろに控へる。)

小 笹。 お使者を御案内申しました。

淀の方。 おゝ、局。ようぞ見えられました。去年の冬陣の砌りには、こなたに色色の苦勞をかけたが、いつも堅固でめでたいの。

阿 茶。 おまへ様にも御機嫌麗はしう、こんなおめでたいことはござりませぬ。

淀の方。 男まさりの局とは云ひながら、去年といひ、今年といひ、老體の身で幾たびか矢玉の間を往來するは、妬ましいほどに健かなことぢや。して、早速ながら今夜の使は……。

阿 茶。 斯様な夜陰に不意の参入は甚た恐れ入りますれど、一刻を争ふ大事でござ

ざりますれば……。

淀の方。その大事とは……。

阿茶。去年と同様、和睦のお使にまゐりました。

淀の方。和睦の使……。(冷笑ふ。)いや、和睦であるまい。降参であらうが……。

阿茶。え。

淀の方。秀頼親子に降参せいと勧めにまゐつたのであらうが……。はて、隠しやんな。この期に及んで何の和睦……。家康の肚の内は隅から隅まで疾うに見ぬいてゐるぞよ。

阿茶。憚りながら此期に及んで、和睦の降参のと、名儀を争ふべき御時節ではござりますまい。去年は格別、今度の軍は御運拙く、諸方の口々もみな敗れて、寄手は明朝の寅の刻を合圖に、いよく總攻めの用意を整へて居ります。所詮落城はもう半日か一日の後と、お覺悟遊ばさねばなりません。

淀の方。(齒齧みをして。)む。

阿茶。さればこそ大御所にも御心を痛めさせられ、右大臣家御親子一刻も早く當城をお開きあつて、茶白山の御陣へまゐられなば、一先づ高野へ移しまるせて、お袋様御隠居料として一萬石を給はるべしとの御沙汰にござりまする。

淀の方。(嘲るやうに。)われく親子を高野へ追ひ籠めて、捨扶持の一萬石……。

阿茶。(押返して。)元よりお慈悲でござりまする。それも畢竟は太閤殿下に對する御好みと、又二つには……。

淀の方。その太閤の好みを忘れずば、なんでこの大坂城に矢玉を向けられたのぢや。

阿茶。それを今更論じてゐる場合ではござりませぬ。差當りてはおとなしく御出城あつて、御親子の御安泰を計らせたまふが、賢い御分別かと存じまする。

淀の方。ほう、なにが賢い。古狸の家康にたぶらかされて、おめくこの城を明け渡し、山流し同様に高野の奥へ追ひやらるゝ。それを賢いと申すのか。ま。

と家康に和睦の心あらば、このまゝに城の圍みを解いて、早々に關東へ引揚げよと、立歸つて申傳へられい。

阿茶。(諭すやうに。)先づお鎮まり下さりませ。昨年和睦の砌りにも、わたくしがお使に立ちまして、仰せの通りに圍みを解き、早々に關東へ引揚げましたが、その時と唯今とは逆も一つにはなりません。意地も我慢も時に因ります。くども申す通り、明日はいよく總攻、その貝の音のきこえぬ中に御思案遊ばさねば相成りますまい。おまへ様は兎も角も、右大臣家おいとしいとは思召されませぬか。

淀の方。その秀頼が愛しいと思へばこそ……。(ほろりとする。)それも今は仇となつた。

阿茶。さあ、それを仇にすると爲ぬきは、おまへ様のお心次第。な、御合點がまゐりましたか。

淀の方。いや。その愛しい秀頼に降参の恥は見せられぬ。ならぬ、ならぬ。ならぬ

ことぢや。(屹として。)これ、局使、大儀ぢや。早う歸りや。

小笹。では、どうでも和睦の儀を……。

お菊。お肯入れはござりませぬか。

淀の方。え、そち達の知らぬことぢや。控へてるやれ。

阿茶。この上は是非もござらぬ。大事のお使を仕損じて、この婆はおめく戻らねばなりません。では、残念ながらこれでお暇申します。

(淀の方は顔を背けてゐる。)

阿茶。(起ち上る。)去年の折にはこれほごでもござらなんだが、いよく募る御疝性。(嘆息しながら小笹とお菊を見かへる。)御母公様の御介抱、くれぐれもお頼み申しますぞ。

二人。はあ。

(局は下の方へゆきかゝる。小笹とお菊も見送らうとして起ちかゝる。局は立停りて二人を見かへる。)

阿茶。右大臣家の御座所はいづれでござりまするな。

お菊。上様には千疊敷に御座遊ばされます。

阿茶。千疊敷に……。憚りながら御案内下さらぬか。

お菊。え。(少し躊躇する。)

(これを聞くと、淀の方は俄に向き直る。)

淀の方。なに、千疊敷へ……。これ、局。

阿茶。はあ。(見かへる。)

淀の方。秀頼に逢うて何とするのぢや。

阿茶。去年この方お目通をいたしませねば、よそながらの御暇乞ひとも存じま

して……。

淀の方。ならぬ、ならぬ。秀頼に逢はすことはなりませんぞ。

阿茶。なりませんか。

(淀の方は懐剣を把り出して、つか／＼と上段の間を降りる。お菊はおどろ

いて淀の方を遮り、小笹は局を圍ふ。)

淀の方。暇乞ひなどとは當座の間に合せ、又もや秀頼をたぶらかして、無理強ひ

に降参させうとするのか。いや、さうぢや。屹こさうぢや。古狸の家康が手先に

なつて、われ／＼親子に此上の恥辱を見せようとする古貉のお局殿、一刻も早う

こゝを立去れば可し、いつまでもこゝらにうろ／＼してゐたら、この淀が最期の

道連れに化の皮を引き剥いてくれうぞ。(懐剣に手をかける。)

お菊。さりとて御短慮、先づ／＼お鎮まり遊ばしませ。

淀の方。(いよく亢奮して。)いや、いや、邪魔するな。さあ、古貉、古狸、尻尾

をまいて早う立去れ。え、立去らぬか。

阿茶。(徐かに。)貉でも狸でも仔細ござらぬ。獵夫の良にかつゝた親狐と子狐、

あまりに哀れに思へばこそ、斯うしてわざ／＼出て來ましたのも、古狸や古貉の

情は知られぬか。

淀の方。さふいふおのれこそ鼠を餌にして、親狐や子狐を釣り出さうとするのぢ

や。その手に乗つてよいものか。さあ、行け。え、まだ行かぬか。

(淀の方詰めよるをお菊は支へる。)

小 笹。(局に)何を申すも今の場合、云へば云ふほど御機嫌を損ずるばかり。兎もかくも此のまゝお引取りを……。

淀の方。まだ行かぬか。

阿 茶。なぜ其のやうに狂はるゝか。家國のほろぶる時は是非なもの、人の心がみな狂ふ。とは云へ、寅の刻までにはまだ二時の間もある。それまでに今一度、心をしづめて勘考なされ。(行きかゝる。)

小 笹。それ、お腰元衆。(呼ぶ。)

侍 女。はあ。

(以前の侍女どもは雪洞を持ちて下の方より出づ。)

小 笹。それ、お見送りを……。

侍 女。はあ。

お 菊。かうお出でなされませ。

(お菊は先に立ち、侍女どもは局を案内して下の方に立去る。)

淀の方。(憎さけに見送る。)ほんに憎い奴、去年も散々にみづからをたぶらかして、濠を埋めさせ、堤を崩させ、この城の壽命を縮めて置いて、又しても欺しに來居つたか。これ、小笹。

小 笹。はい。

淀の方。古狸の使めはよもや千疊敷へ参りはすまいな。

小 笹。すぐにお引取りなされたでござりませう。

淀の方。ござりませうでは覺束ない。早う行つて見こけて來や。あの使を秀頼に逢はせてはならぬ。達て逢はうと云ひ張るなら、容赦せず引摺り出しや。

小 笹。はあ。

淀の方。早う行きや。

小 笹。はあ。(早々に下の方へ立去る。)

……大 坂 城……

(淀の方は氣疲れがしたやうによくとなりて、上段の間のあがり框に腰を落してほつと息をつく。うしろに控へたる侍女もは立寄つて介抱す。)

淀の方。 おゝ、夜が更けても蒸暑いやうな。(懐紙を出して額の汗を拭く。) おゝ、おびたゞしい此の汗は……。唯つた今の化粧もみな顔れてしまつた。これ、盥に水を持つて来や。

侍女。 はあ。

淀の方。 化粧道具も取揃へて来や。

侍女。 はあ。

(侍女どもは奥に入る。薄く雨の音、陣鐘の音遠くきこゆ。淀の方は框に腰を落したまゝにて、息をついてゐる。燈臺の灯がうす暗くなる。)

淀の方。(耳を傾ける。) や、誰ぢや。 おゝ、秀次か。 何、この大坂を立退いて高野へまゐれと……。 高野の青巖寺……。 そこでお身は腹を切つたと……。 (屹となつて。) 忌ぢや、忌ぢや。 なんで其のやうなところへ行くものぞ。 おのれは其の恨で

秀頼親子を高野へ引き寄せようといふか。 えゝ、寄るな、寄るな。(懐劍に手をかけて透し視る。) や、お身は太閤……。 おゝ、太閤殿下……。 (懐劍を捨てゝ坐る。) 何、なんと仰せらるゝ。 一旦の恥を忍んで家康の情にすがり、高野へ立退いて時節を待て……。 豊臣の家を断すな……。 えゝ、さりとはお恨めしい。(涙をはらゝと流す。) なるほご豊臣の家も大切でもござりませうが、こゝを立退いて高野へ引き移る——そのやうなことがなるか成らぬか、よう積つても御覽なされませ。

(淀の方は泣き伏す。下の方の廊下づたひに、伊集院半兵衛忍び出で、次の間に小膝をつきて窺ふ。)

淀の方。 たとひお前様のお諭しでも、淀はこゝを動きませぬ。 この大坂を人手には渡させぬ。 おめくゝとこゝを立退く程ならば、唯今もあの使を追ひ返しは致しませぬ。 ……あゝもし、殿下。 顔の色を變へていづれへお出でなされます。 あゝもし……。

(淀の方は見えぬものを追ふやうに、上の方より下の方を見まはして、彼の

……大坂城……

半兵衛に眼をつける。

淀の方。(透し視る。)あ、そこにゐるは誰ぢや。(再び懐劍を拾ひ取る。)そぢは誰ぢや、何者ぢや。え、返事をせぬか、名乗らぬか。

(燈臺は再び明るくなる。半兵衛はそこに平伏す。)

淀の方。や、見馴れぬ奴。なんととしてこゝへ踏み込んでまるつたぞ。扱はおのれ、關東の忍びの者か。(懐劍に手をかけて詰める。)

半兵衛。(手をあけて制す。)恐れながらそれは思召違ひ、それがしは決して左様なものではござりませぬ。島津薩摩守の家來伊集院半兵衛、密々にお目通りを願ひたさに、これまで推参いたしてござりまする。

淀の方。(猶油斷せず。)して、その薩摩の家來が誰に許されて、案内も無しにこれへ参つたぞ。

半兵衛。無禮は幾重にもお詫び申上げます。京橋口に小舟を漕ぎ寄せ、御城内へ忍び入らんとするところへ、折好く速水甲斐どのが参り合はされ、その御案内

にて安々と入城いたしてござりまする。それよりすぐに千疊敷へまかり出で、大野修理殿、毛利豊前殿、その外の人々列座の前にて、使の口上逐一申上げましたる處、おのくの意見容易に一致せず、上様にも唯打案じておはすのみ、其議論いつ果つべしとも覺えませねば、あまりに心の焦燥ちまするまゝに……。

淀の方。誰の許しも待たずして、つかくこの奥まで参つたか。それにしても、途中の案内が無うてはならぬ筈。誰に致へられてみづからの居間のありかを知つたるぞ。

半兵衛。はあ。(少し躊躇してゐる。)

(下の方よりお菊出づ。)

お菊。恐れながら申上げます。その御案内はわたくしが……。

淀の方。菊が連れてまゐつたか。

半兵衛。かへすくも無禮の段々、眞平御めん下されませう。(平伏す。)

淀の方。(少しく色解けて。)それで先づ仔細は判つたが、薩摩守が使の口上、改め

……大坂城……

てみづからに申聞かせい。

(淀の方はお菊に扶けられて、上段の間に戻る。)

淀の方。 半兵衛とやら、近う。

半兵衛。 はあ。

(半兵衛はお菊に眼で知らせて、入口に氣をつけてくれといふ。お菊は心得て下の方の廊下口へゆき、うしろ向きになりて外を窺ひるる。)

半兵衛。(進み出づ。)心急きでござりますれば、先づ搔揃んで口上の大意を申上げ

まする。主人薩摩守が此のたび我々を差越しましたるは餘の儀でもござりませぬ。

上様御親子には早々に當城をお開きあつて、薩摩の國へお越し遊ばされよとの事にござりまする。

淀の方。 秀頼親子に薩摩へ落ちよといふ、その使にまるつたか。

半兵衛。 恐れながら當城の御運も所詮長くは保つまじと、薩摩守にも懸念のあまり、おん迎へとして窃かに我々を遣はし、上様、淀様お二方を恙なくお伴ひ申せ

と固く申付けられてござりまする。

淀の方。 さりとて關東の大軍に圍まれたる城内から、どこを何う抜け出して西國まで案内しやるぞ。

半兵衛。 その御懸念は御無用。仰せの如く、大手その他の口々には關東勢充滿して居りますれど、京橋口にはたゞ川向ひに見張りの人数が配つてあるばかりで、格別嚴重な固めもござりませぬ。お迎への役は池邊權五郎とそれがしの兩人、小舟を川口につないでござりますれば、被衣目深にお姿を隠し、闇にまぎれてお忍び下さりませれば、すぐに沖まで漕ぎ出して、そこにかかりし元船に御案内。それから先は海の上、安々と御立退きも相成りまする。

淀の方。 むゝ。(考へてゐる。)

半兵衛。 うけたまはれば、敵も明早朝より總攻にかゝるべき氣勢を示してゐると申す。最早御猶豫は相成りませぬ。夜のあけぬ中に御立退きの程ひとへに願はしう存じまする。

淀の方。して、秀頼は何と云ひました。

半兵衛。唯今も申上ぐる通り、上様には唯打案じておはすのみで、確としたる仰

せ出でもござりませぬが、御母公様よりお勧め下さりませうならば、元より御孝
心深き上様、おそらく御違背はござるまいかと存じまする。

淀の方。むゝ。(まだ考へてゐる。)

半兵衛。(急いで。)くどくも申上ぐるやうなれど、一時半時を争ふ今の場合、もは
や御猶豫は相成りませぬ。些とも早う御思案なされて……。

淀の方。はて、騒がしい。

半兵衛。(膝をすゝめる。)ではござれども、どうでも今宵を過されぬ大事、すぐに
お仕度を願ひまする。京橋口には小舟をつないでござりますれば、それに召され
て沖合まで……。

淀の方。もう判つた。くさう云やるな。

半兵衛。お判りになりましたれば、すぐにお立ちを……。

お菊。(淀の方は黙つてゐる。陣鐘にまじりて螺の音きこゆ。お菊は引返して来る。)
あれ、お聞きなされましたか。陣鐘にまじる貝の音が次第に近いてまる
りまする。

(淀の方も半兵衛も耳を傾ける。)

半兵衛。むゝ。さては東の白むを待ち兼ねて、敵はおひくくに繰出すと見えます
る。(淀の方に。)お聞きの通りでござりますれば、猶豫して御後悔遊ばしまするな。
淀の方。はて、なんの後悔……。あまりにがやくと騒ぐので気が逆上せる。こ
れ、菊。いつもの養胃湯を煎じて來や。

お菊。はあ。(下の方に立去る。)

淀の方。まだ五月の初めといふに、なぜ此のやうに蒸暑いぞ。(懐紙にて顔を拭
く。)おゝ、氣味の悪いほぎに汗が滲んだ。腰元どもは何をしてゐることやら。

(淀の方はそこにある小さい鈴を把りて振る。螺の音又きこゆ。半兵衛は不
安らしく適ちあがりて、下の方より庭の方を覗く。上の方の襖をあけて、以

前の侍女どもは盥その他の化粧道具をさゝけて出づ。

淀の方。(胸を押へる。)気が逆上せるばかりでなく、何やら胸も痛んで来た。菊に早う薬を持って来いと云やれ。

侍女。はあ。

(侍女二人は下の方に立去る。)

淀の方。(鏡にむかひて。)はて、なぜか鏡が曇つてならぬ。燈火を近う持つて来や。侍女。はあ。(燈臺を淀の方のそばへ持つてゆく。)

淀の方。おゝ、髪も亂れた。化粧も頽れた。小笹は居らぬか。髪をあけるのは小笹でなくては氣に入らぬ。どこにゐるか、すぐに探して呼んで来や。

(侍女二人は上の方に入る。半兵衛は矢はり立つたるまゝにて下の方を眺めてゐる。侍女は皆立去りて、淀の方はたゞ一人にて鏡に向ふ。うすく雨の音。)

淀の方。はて、なぜ曇るか。(淀の方は獨り言を云ひながら、懐紙にて幾たびか鏡の面を拭きたるが、さ

うも氣に入らぬといふ心にて、更に燈臺を引きよせ、盥の水に自分の顔をつして見る。矢はり雨の音、陣鐘の音うすく聞ゆ。淀の方はしばらく無言にて、盥に映る顔をちつと見つめてゐる。燈臺の灯はだんくんに薄くなる。半兵衛は立戻りて、これもちつと淀の方の様子をうかがひるる。)

淀の方。(顔をあげて半兵衛に眼をつける。)おゝ、薩摩の使……。まだ其處にゐやつたか。

半兵衛。はあ。(坐る。)

淀の方。なぜいつまでも其處にゐる。

半兵衛。御返事を御待ち申して居りまする。

(下の方よりお菊は藥湯を持ちて出で、次の間にて窺ふ。)

淀の方。返事とは何の返事ぢや。

半兵衛。西國へ御立退きの……。

(云ひながら淀の方の顔を見あけて、半兵衛はぞつこして俄に怖ろしくな

淀の方。 まだそれを云うてゐるのか。折角の使ぢや、秀頼に代つてみづからが返事する。

半兵衛。 はあ。

淀の方。 薩摩は愚か、五里か十里の隣國へも我々親子は行くまいぞ。

半兵衛。 え。

淀の方。 (うは枯れたる聲。) おゝ、行かぬ、行かぬ。この大坂城は一足も動くまいぞ。

半兵衛。 (恐るく)でも、落城が眼の前に……。

淀の方。 落城したら母も子も一所にこゝで亡ぶるまでぢや。先刻は關東方から阿茶の局が来て、おとなしく此の城を出るならば、秀頼親子の命を助けて、高野へ送つて遣らうといふ。今は又薩摩から使が来て、西國にかくまつて遣らうといふ。敵に附いても、味方に附いても、われく親子の命は助かる。それを知りつゝこ

ゝを動かぬは、この城に……この大坂の城に……根強い執心があるからぢや。

半兵衛。 その御執心はさる事ながら、見すく開くる御運を捨て、この城と俱

にほろぶるとは、あまりに頑拗な御心かと憚りながら存じまする。

淀の方。 (冷かに笑ふ。) ほゝ、頑拗とも云へ、愚かとも云へ、みづからにはみづからの心がある。陪臣者のそち達が要らぬ諫言は無用であらうぞ。

半兵衛。 はあ。

淀の方。 とはいふものゝ、大事の使をうけたまはつて、わざくこの城内まで入込んで来たそちの奉公、第一には薩摩守の志、それに對して此の淀が云ひ残すことがある。(再び鹽に映る顔をぢつと見る。) 女子の誇りは髮形、太閤御在世の砌りはいふに及ばず、太閤この世を去らせてより十七年の今日が日まで、明暮れの身だしなみ、いつまでも變らぬ春を誇りし我がおもかけも、今この水にうつるを見れば、世におそろしき悪鬼羅刹の相好……。ほんに我ながらも怖ろしい。

半兵衛。 え。

淀の方。 淀は生きながら鬼になつたと見ゆる。

(半兵衛は思はず小膝を立て、覗き込まうとする。うしろにうかがひるたるお菊も思はず進み入りて覗かうとする。この途端に淀の方は顔をあげて見かへる。その物すごき顔を見て、お菊ははつと驚き、持つたる薬湯の椀を取り落す。燈臺の灯はだん／＼に明るくなる。)

淀の方。 おゝ、菊か。

お 菊。 飛んだ粗忽をいたしまして、なんとも申譯がござりませぬ。(ひれ伏す。)

淀の方。 みづからの顔がそれほどに怖ろしう見えたか。

お 菊。 え。

淀の方。 定めし怖ろしう見えたであらう。半兵衛、よう聴いて置け。たとひこの大坂は一日か二日かの中に落城して、何者が代つてこの城に住まうとも、淀は決してこゝを動かぬ。この身は劔に伏すとも、火に焚かるゝとも、人間の執念、みづからの魂はこゝに留まつて、いつまでも此城の主ぢや。二十年三十年、五十年

百年の後までも、此のまゝにぢつと控へてゐるぞよ。もし疑ふならば、何時でも尋ねてまるれ。淀はこの姿でそち達に逢はうぞ。豊臣一家がほろびて後、大坂城内に不入の間があらば、そこをみづからの住家と思へ。

(燈臺の火はいよ／＼暗くなる。半兵衛もお菊も物のおそろしさに沈黙してゐる。俄に聞ゆる陣鐘の音。下の方より小笹は鉢巻して籠手をつけ、かひがひしく扮装ちて長刀を持ち、おなじく武装したる侍女四人に雪洞を持たせて出づ。)

小 笹。 申上げまする。

淀の方。 なんぢや。

小 笹。 敵は夜の白むを待ち兼ねて、三方の口々より一度に押寄せてまゐりまする。

淀の方。 それは元より覺悟の上、今更慌つるには及ばぬことぢや。

小 笹。 なれども、正面の敵ばかりでなく、御城内にも裏切の者あるとやら。

半兵衛。何、裏切……。して、して、それは何者でござるな。

小 笹。何者とも確かには判りませぬが、誰云ふとなく左様な噂がそれからそれへと傳はりました、いづれも疑心暗鬼の譬、誰が敵やら味方やら、たがひに疑うて居ります。兎にも角にもこの時節、御母公様にも必ず御油断遊ばしまするな。
淀の方。よい、よい。味方とて頼まれぬはみづからも豫て知つてゐる。まして此の時節ぢや、まことに油断はならぬ。小笹は入口を確と固めて、一人たりとも妄りに入るゝな。

小 笹。はあ。

(小笹は侍女を連れて下の方に去る。)

お 菊。では、今一度お薬を……。 (起ちかゝる。)

淀の方。あ、待ちや。もう薬には及ばぬ。煎じてゐる間を待つも悶しい。その器をこれへ。

お 菊。はあ。

(お菊は不審さうに椀をさぐれば、淀の方はその椀にて鹽の水をすくひて飲む。)

お 菊。(おどろく。)あれ、お化粧の水を……。

淀の方。飲んで悪いか。かうなれば化粧の水はおろか、溝の水でも飲まうも知れぬ。つたへ聞く天狗道の苦みも斯くやとばかりに、總身が燃えて、燃えて、火焰の吐息……。熱や、あつや、骨も肉も焼け爛れるやうぢや。

(淀の方は肩で息をしてゐる。下の方より速水甲斐守、兜を持ち出て出づ。)

甲 斐。薩摩のお使、これに居られたか。

半兵衛。(待兼ねたやうに。)して、御前の御評議は如何様に御決着相成りましたな。

甲 斐。評議はまちくで徒らに時刻を移すばかり。この上には御母公様の御意見をかきふより外はござらぬ。(淀の方の前に手をつく。)薩摩の使がこれにあるからは、委細の口上、最早お聴取りに相成りましたか。
淀の方。お、聴いた。みな聴きました。

甲 斐。御承知とあれば諄うは申上げませぬ。われくは蹈み留まつてお城を枕に討死、上様御母公様のお二方には、これなる薩摩の使をお供にお連れ遊ばして、夜のあけぬ間にお開きを……。

淀の方。え、そちまでが同じことを……。みづからは何うでもこゝを動かぬ。

(半兵衛を見かへる。)おのれ、まだ其處にゐるか。くだい奴、早う歸りや。

半兵衛。大事のお使を仕損じたる半兵衛、このまゝおめくとは歸られませぬ。

方々の御先途をお見とゞけ申して、それがしも追腹つかまつる。

甲 斐。では、お身も城を去らぬといふか。

お 菊。さうして一所に追腹を……。

半兵衛。御念に及ばぬ。薩摩の侍は左様に教へられてござる。

淀の方。(物すごく打笑む。)お、そちも死ぬるか。この上は誰も彼もみな死ぬる

がよい。秀頼も死ぬ、甲斐も死ぬ、半兵衛も死ぬ、菊も死ぬ、小笹も死ぬ。腰元

共も侍も……。犬も猫も馬も鼠も……。この大坂城にあるほどの者はみな死ぬる

がよいぞ。ほ、死ぬる者はわれくばかりでない。あの家康めも今から一年とは生きさせぬ。來年……お、來年の今頃までには、屹とあの世へ招き寄せて見せうぞ。

(淀の方はすつくと起つて、向うを睨みつめながら框より降りかゝる。お菊はその相好の物すごきに恐れて、小聲にあつと叫びながら顔を隠す。半兵衛は思はず起つて淀の力の行手を遮らうとする。甲斐はちつとうつむきて嘆息す。雨の音、陣鐘の音。幕。

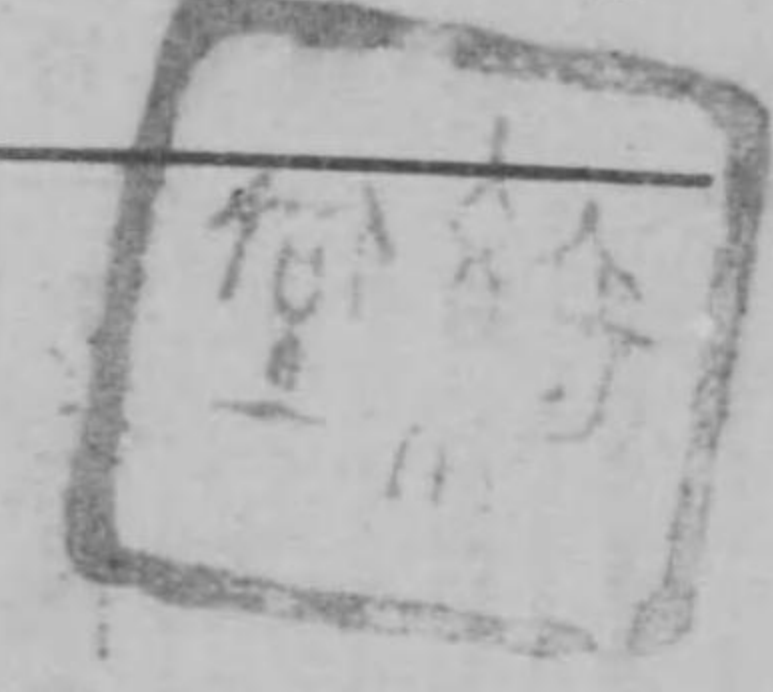
大正十一年七月廿四日印刷

「山月集」

大正十一年七月廿七日發行

定價金壹圓五拾錢

著者權者印



著者 岡本敬二

東京市日本橋區通四丁目五番地

發行者 和田利彦

東京市神田區松木町七番地

印刷者 佐藤磨

東京市神田區松木町七番地

印刷所 明治印刷株式會社

發行所 東京市日本橋區通四丁目日本春

電話本局五一・四二一〇番
陽堂
振替東京一六一七番

名家傑作集

各冊八拾五錢・送料各六錢

第十二篇	第十一篇	第十篇	第九篇	第八篇	第七篇	第六篇	第五篇	第四篇	第三篇	第二篇	第一篇
還魂錄	彼女少年	月夜の美感	五月の懺	十五夜の來	歸去の來	野の花	白露露	水彩畫家	照葉狂言	其面影	不言不語
森鷗外氏著	德田秋聲氏著	高山樗牛氏著	正宗白鳥氏著	樋口一葉女史著	國木田獨步氏著	田山花袋氏著	幸田露伴氏著	島崎藤村氏著	泉鏡花氏著	二葉亭四迷氏著	尾崎紅葉氏著

276
350

終

